

佐田峠墳墓群（第2次）調査

野島 永・石貫弘泰・小林昂博
・辻村哲農・宮岡昌宣

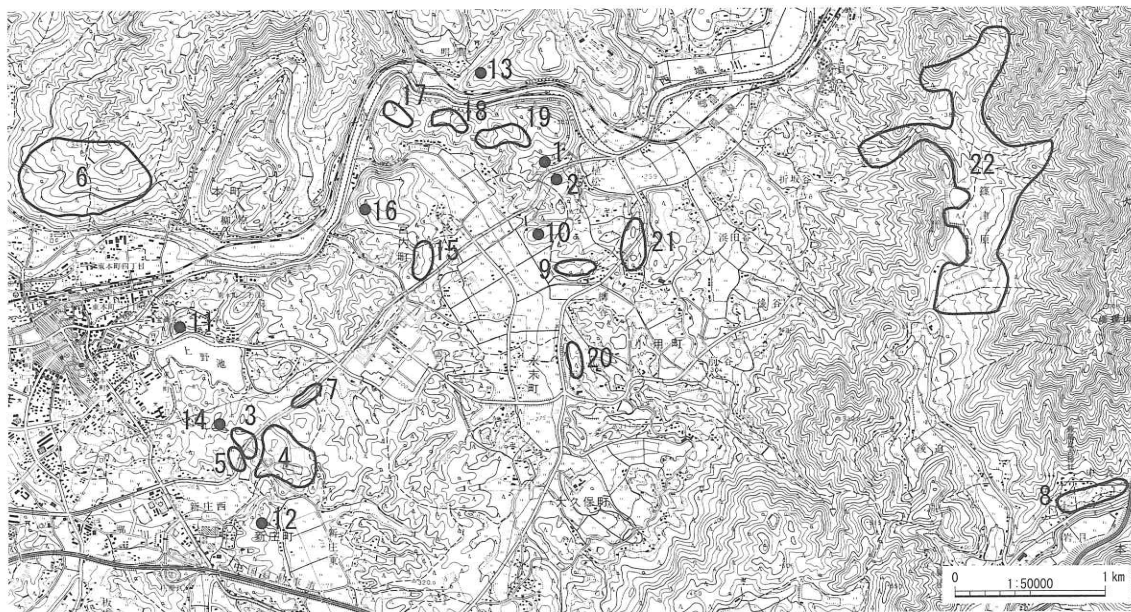
1. 位置と環境（第1図）

佐田峠墳墓群は広島県庄原市宮内町佐田峠に所在する。庄原市街から西城川沿いに北東へ4kmの、高町と宮内町の境界付近、西城川左岸の低丘陵上に位置する。本墳墓群は隣接する佐田谷墳墓群と国道183号線によって分断されている。

市内には他に多くの遺跡が知られるが、西城川左岸の遺跡密集地域について古墳時代までの主要な遺跡について概観する。

旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺跡は、佐田谷・佐田峠墳墓群下層遺跡（妹尾1987）が知られている。この遺跡では後期旧石器時代前半に属するのではないかと考えられる水晶製石核・剥片が出土した。その他に新庄町の小和田遺跡（桑原1982a）では槍先形尖頭器（後期旧石器時代終末期）が出土している。縄文時代の遺跡には、新庄町和田原遺跡群（草創期・早期）（松井1999）があり、D地点から有茎尖頭器が出土している。また和田原遺跡のB・D地点（早期）からは楕円形や山形の押型文土器が出土している（藤田1988、松井1999）。

弥生時代 前期の遺跡では前期の甕形土器が出土した新庄町の西山遺跡（桑原1982b）が挙げられる。中期の遺跡では、和田原遺跡群（藤田1988、稲垣2001、稲垣・今西2004）や御神田山遺跡群（藤田1988）などの、丘陵上で継続的に営まれた拠点集落的な性格をもつ遺



第1図 佐田峠墳墓群周辺主要遺跡分布地図

1. 佐田峠墳墓群 2. 佐田谷墳墓群 3. 小和田遺跡 4. 和田原遺跡群 5. 西山遺跡
6. 御神田山遺跡群 7. 永宗遺跡 8. 鋤寄遺跡 9. 広政古墳群 10. 矢崎古墳
11. 瓢山古墳 12. 地王神社古墳 13. 唐櫃古墳 14. 牛塚古墳 15. 陰地古墳群 16. 殿畠山古墳
17. 大歳古墳群 18. 山根古墳群 19. 寄藤山古墳群 20. 永末古墳群 21. 柳谷古墳群
22. 篠津原遺跡群

跡が挙げられる。和田原遺跡群の住居跡からは、塩町式の台形土器や銅鐸形土製品、分銅形土製品が出土している。三次市を中心とした地域一帯では、中期後葉から後期初頭にかけて、加飾性の豊かな塩町式土器が広く用いられるが、後期には衰退し、山陰に系譜をもつ土器が多数みられるようになる。後期末葉の遺跡である妙見山遺跡では出土した土器のほとんどを山陰系土器が占める。

墳墓としては、弥生時代中期末葉から後期前葉の佐田谷墳墓群（妹尾 1987）がある。発掘調査を行った結果、1号墓は四隅突出型墳丘墓と判明したが、2・3号墓も四隅突出型墳丘墓の可能性が高いと考えられる。1号墓の墳丘形態はほぼ長方形（東西 19 m、南北 14 m、高さ 1.5 m）であり、東側を除く各辺に深さ 0.1～0.4 m の溝を設ける。墳丘斜面には 4～6 段の貼石がある。埋葬施設は墳頂部で 4 基検出された。中央の墓壙（SK2）が最も大きく、木棺・木槨の 2 重構造をもつ。副葬品はないが、墓壙上面の浅い掘り込みから弥生時代後期初頭の土器（壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器）が拳大の円礫とともに出土した。2号墓（東西 17 m、南北 13 m、高さ東側 1 m・西側 0.5 m）は 1号墓の東隣に位置し、墳丘上で供献したと思われる弥生時代後期前葉の土器（壺形土器・器台形土器）が採集された。3号墓（東西 24 m、南北 11 m、高さは溝底から 1.8 m）は 1号墓の南に位置し、北側に設けられた溝内から弥生時代中期後葉の土器（甕形土器・器台形土器）が出土した。

なお、佐田峠墳墓群と佐田谷墳墓群は、同じ丘陵上に造営されていたことから一連の墳墓群の可能性が高い。また、周辺に所在する和田原遺跡群などの拠点的な集落は、その隆盛した時期が両墳墓群とほぼ同時期であることから、両墳墓群を造営した集団であったことが推定できる。

古墳時代 古墳時代の遺跡としては、弥生時代から続く妙見山遺跡などの他に、新庄町の永宗遺跡（沢元 1982）、本村町の鋤寄遺跡（潮見 1958）、西山遺跡、小和田遺跡などがある。

当該地域の遺跡には前方後円墳が数多く築造される。その中でも旧寺古墳（1号墳）（藤野 1983）は全長が 61.7 m で、最大規模の前方後円墳である。この古墳は二段築成で、葺石をもち、円筒埴輪・形象埴輪が出土した。5 世紀前葉頃と考えられている。他に主要な前方後円墳に小用町の広政第 2 号墳（全長 48 m）（広島大学測量実習参加学生一同 1982）、矢崎古墳（全長 56.0 m）（高橋 1986）、東本町の瓢山古墳（1号墳：全長 41.0 m）（古瀬 1991）、川西町の唐櫃古墳（全長 48.6 m）（稲垣 2000、稲垣・今西 2005）などがあり、5～6 世紀代の地域首長墓であろう。（小林昂博）

2. 調査の経過

（1）過去の調査

昭和 61 年度、（財）広島県埋蔵文化財調査センターの発掘調査によって、佐田谷墳墓群 1 号墓が後期初頭に属する初期四隅突出型墳丘墓であることが判明した（妹尾 1987）。それとともなって西側丘陵上に同様の長方形墳丘をもつ佐田峠墳墓群の存在が確認された。

平成8・9年度には庄原市教育委員会によって佐田峠墳墓群の範囲確認のための試掘調査が行われ、墳丘裾部と想定される位置に小規模な試掘トレンチを設定した。掘削の結果、3号墓も四隅突出型墳丘墓である可能性が高いとされた。また、弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての弥生土器片100点以上が出土した。さらに3号墓の東側に4・5号墓も確認された。5号墓は貼石をもつ方形周溝墓の可能性はある。

広島大学考古学研究室では庄原市教育委員会から遺跡群の学術的な内容を把握するための調査要請を受けて、平成19年度から調査を開始した。第1次調査としてまず墳丘の測量調査を実施した。

墳丘測量は備北地域事務所建設局庄原支局工務第二課2級基準点（GPS測量、平成9年7月18日）から国土座標を移動して基準点を設定し、従来の平板測量とともに墳丘墓の3Dスキニング（Trimble GX）を実施した。調査の結果、まず墳丘規模について、1号墓は南北12m、東西9m前後、2号墓は南北8m、東西15m前後、独立して築造された3号墓は南北10m、東西16.5m前後で、それぞれ長方形の墳丘を持つことが明らかになった。つぎに築造時期について、3号墓は1・2号墓以前に築造され、弥生時代中期後葉にまで遡る可能性が高いことが判明した。さらに、3号墓に先行して方形周溝墓が存在していた可能性があり、この方形周溝墓の精査によっては当該地域における墳丘墓の成立過程が復元できる可能性があるといえる。最後に、佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の関連遺跡などの調査成果を考慮しつつ、三次・庄原盆地における四隅突出型墳丘墓の成立背景の一端を解明できる発掘調査であることを改めて確認できた。

（宮岡昌宣）

（2）調査の目的

先述したように、破壊を免れた佐田谷・佐田峠両墳墓群の史跡指定の可能性を模索するために、庄原市教育委員会から広島大学考古学研究室に学術的な性格を把握するための調査依頼があった。広島大学考古学研究室では、両墳墓群の所属時期や規模といった性格だけでなく、塩町式土器の成立・普及と四隅突出型墳丘墓の関連など、弥生時代墳丘墓の成立背景の解明をも目指した佐田谷・佐田峠墳墓群の測量および発掘調査を計画し、昨年度は墳丘測量を実施することとなった（古瀬・竹広・野島2008）。

佐田峠墳墓群の墳丘測量調査の結果、とくに3号墓は平成9年度の試掘調査ののち、植林のために重機で墳丘頂部がなだらかに削平されたため、墳丘に著しい改変を受けていることが判明した。また、3号墓は測量した3基の長方形墳丘のうち、長幅比が最も大きく、その築造時期が弥生時代中期後葉にまでさかのぼる可能性が高いと考えられた。佐田峠墳墓群と佐田谷墳墓群との時期的な関係を解明するために佐田峠墳墓群でも最も古いと考えられた3号墓の築造時期を解明する必要がある。このことから、庄原市教育委員会と協議のうえ、3号墓の損壊状況と埋葬施設の確認を目的とした発掘調査を実施することとした。

3号墓は平成9年度の庄原市教育委員会の試掘調査で出土した土器の様相から、弥生時代中期後葉ごろに築造された四隅突出型墳丘墓の可能性があると推測された。このため三次・庄原地域における四隅突出型墳丘墓の初源的な様相をとらえる目的で、墳丘の規模と墳丘構

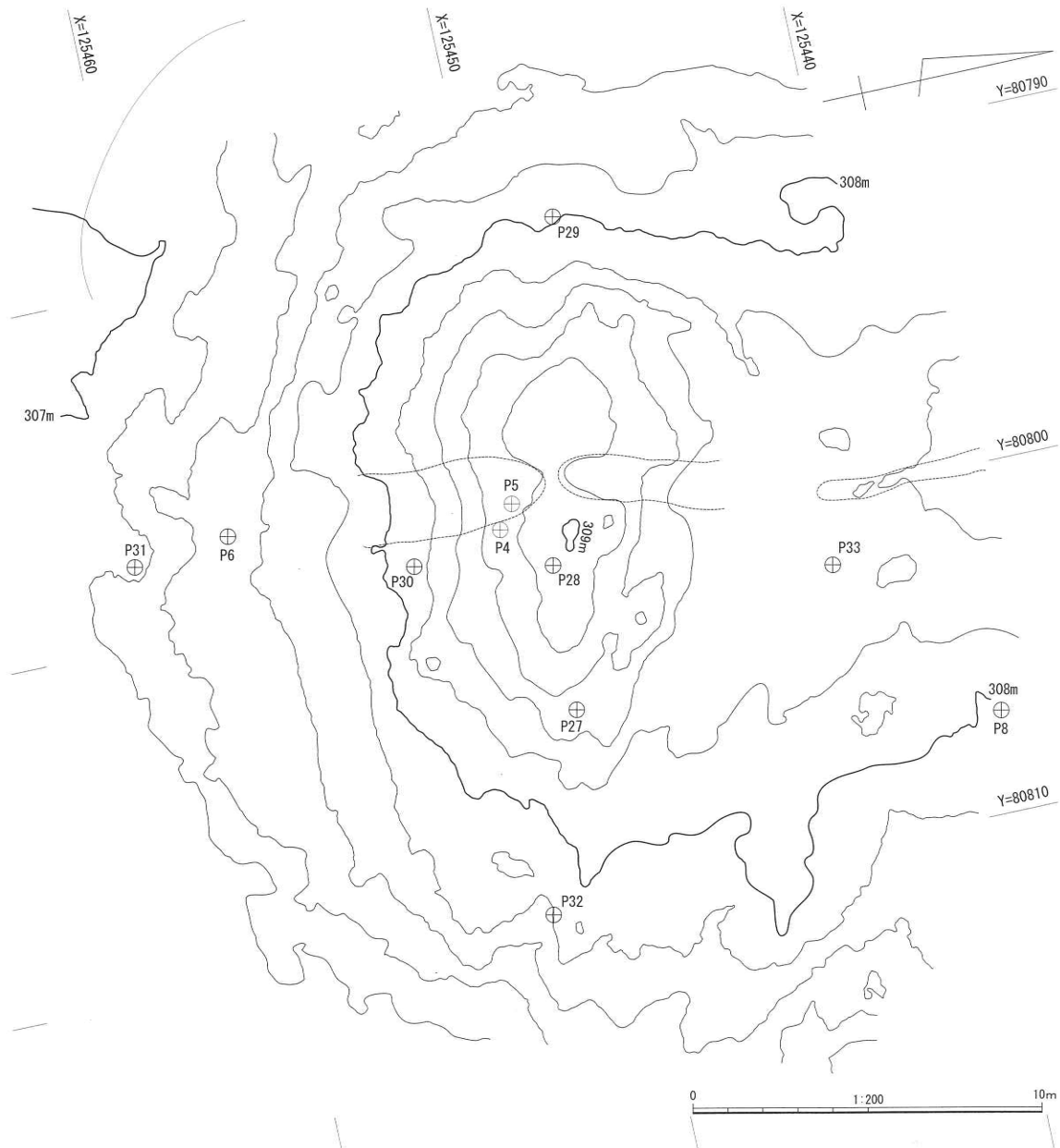
築状況、墳丘隅角部の形状とその構造、埋葬施設の数、墳丘長軸と埋葬施設との位置関係について調査を行った。(野島永・石貫弘泰)

3. 墳丘の構造

(1) 墳丘の現状(第2図)

佐田峠3号墓は西から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵の標高約308m付近に立地する。佐田峠墳墓群は3号墓を頂点に4号墓、5号墓と続き、少し離れた位置に1号墓と2号墓がある。墳墓群の位置する場所はヒノキの植林がおこなわれており、3号墓もその木々の中に存在している。昨年度の第1次調査において3号墓の測量図を作成した。

3号墓は東西方向を長軸とする四隅突出型墳丘墓である。墳丘南側と西側の等高線は乱れ

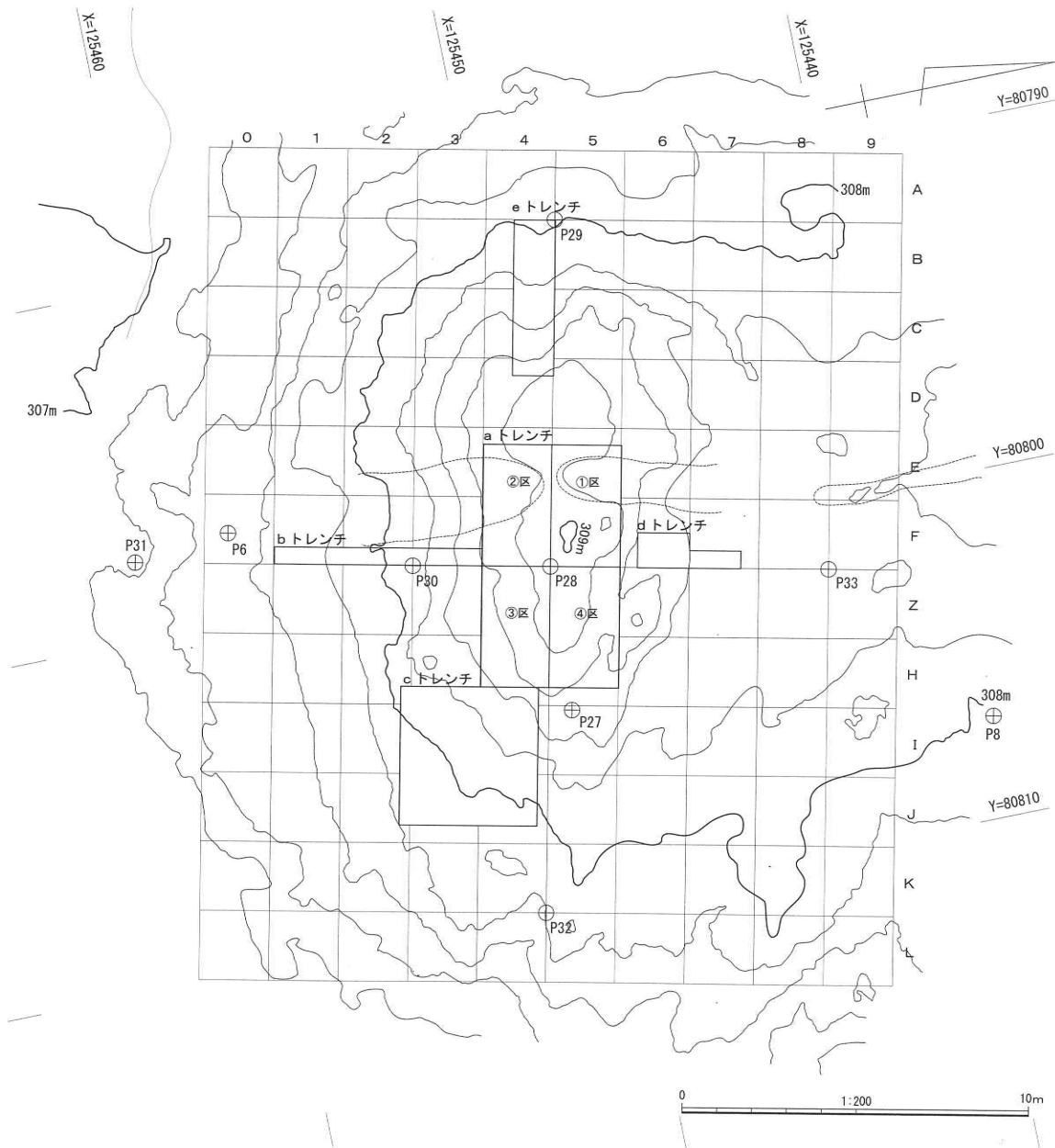


第2図 墳丘の現状

が少なく、比較的良好に旧状を残している。一方、東側と北側は等高線に乱れが生じている。特に北側は等高線の乱れが激しく、ほとんど旧状を残していないようである。隅角部については、残存状況の良い南西部においても突出部を想定させるような等高線は描けなかった。

墳丘の北側には、およそ 10 m 四方の範囲に平坦面が存在するが、北側墳丘面の等高線がかなり乱れていることを考えると、この平坦面は植林の際に墳丘面を一部改変して作られた可能性が高い。一方、墳丘の南側は緩やかに傾斜しながら標高 307 m より下のレベルから徐々に自然地形へと変化している。

以上のことから、墳丘の南側および西側は等高線が比較的直線で、旧状を反映しているといえる。そこから判断すると、標高 308.0 m 前後が墳丘の裾部に近いラインと考えられる。標高 308.0 m から 308.8 m までの等高線は密に詰まっており、墳丘斜面を形成する。標高



第3図 トレンチ配置図

308.8 m付近で傾斜が緩やかになっていくことから、そこから内側が墳丘平坦部分と推定できる。よって、墳丘高はおよそ 1.0 m内外であると考えられる。(石貫)

(2) トレンチ設定 (第3図)

墳丘の測量調査 (第1次調査) の成果をもとに、佐田峠3号墓の墳丘の形態・規模・構造を明らかにするために、5本のトレンチを設定した。

a トレンチは南北 4.0 m×東西 7.0 mの墳丘内の平坦面に設定した調査区である。埋葬施設の数・規模・構造や墳丘構造を確認するために設定した。トレンチ内を南北 2.0 m×東西 3.5 mの4区画に分割し、北東方向の区画を①区とし、そこから反時計回りに②、③、④区とした。b・d・eの各トレンチは墳丘の規模と構造を明らかにするための調査区である。つまり、墳丘斜面の貼石の有無、墳丘規模を確定させることを主眼とした。b トレンチは南北 6.0 m×東西 0.5 mとし、墳丘外南側に向けて長く設定した。トレンチを墳丘外にまで長く設定したのは、周溝の有無を確認することと、墳丘外に広がる平坦面が築造当時に造成されたものなのかどうかを旧表土の状況から判断するためである。d トレンチは南北 3.0 m×東西 1.5 mで、北側に南北 1.5 m×東西 0.5 mの拡張区を設けた。e トレンチは南北 1.2 m×東西 4.5 mの調査区である。最後に c トレンチは墳丘南東の隅角の形状と墳丘規模を確認するために設定した。南北 4.0 m×東西 4.0 mの調査区である。(石貫)

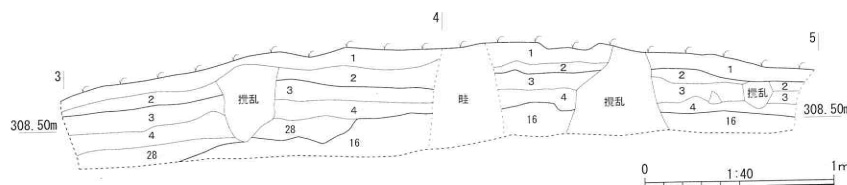
(3) 墳丘の構造

今回、土層に層序番号をつけるにあたり、a トレンチ②区北壁の層序を基準とし、他の壁面で新しく確認した層には、その続きの番号をつけることにした。したがって、第1層、第2層といった1つの層番号はどの調査区においても同一の層であるが、それらの層序番号が堆積の順序を示しているわけではない。

a トレンチ ①区・②区西壁 (第4図)

まず、墳丘の中心と想定した場所に杭 P28 を設置した。そして、P28 を通り、墳丘の長軸である東西方向に平行なラインを墳丘東西主軸と仮定した。また、P28 上の東西主軸と直交するラインを仮の南北主軸とした。a トレンチは P28 から東西それぞれ 3.5 m、南北それぞれ 2.0 mの範囲 (東西 7.0 m×南北 4.0 m) を調査区として設定した。墳丘平坦面での盛土の構造を明らかにするため、トレンチ内の①区・②区西壁を基準的な観察面にあてた。

層位 第1層は表土層である。第2層は褐色土層で、第3層以下の土層に特徴的なブロック状の黒ボク土やキビ土が含まれておらず、粘性としまりも弱い再堆積土の可能性が高い。第3層は黒褐色土層で、キビ土ブロックを含む。この層は設定した a トレンチ全体にわたって検出される土層であることから、墳丘全体を覆うような盛土と考えることができる。



第4図 a トレンチ①区・②区西壁断面図

第4層は黒褐色土層で、a トレンチの①・②区にしかみられず、後述する墓墳 ST02 の上面に限っ

て堆積していることから墓壙 ST02 の封土と考えられる。ところで、第4図に示す第28層は黒色土層で、微細なキビ土ブロックを含むものである。①区では第16層が第28層と同じレベルで堆積している。第28層と第16層は色調的な違いはあまり無いが、第28層にはキビ土のブロックが混入しており、第3層、第4層と同じく人為的に築成した盛土層と推定できる。第16層は黒色土層で、設定したaトレンチ全体にわたってみられる。この層には黒ボク土やキビ土のブロックが混入しておらず、自然堆積層と考えられる。

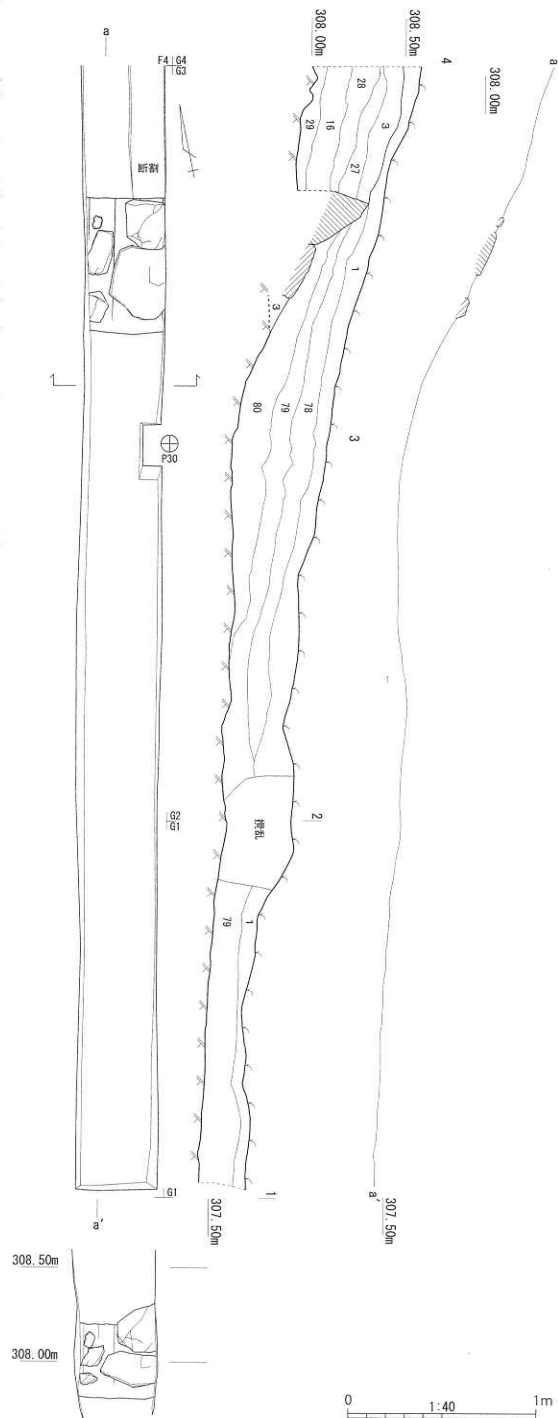
遺 構 ①区の第16層の上面レベルと第28層の上面レベルはほぼ一定のレベルを保っていることから、第16層のレベルが低い部分に第28層を充填していると推定できる。第16層が比較的水平的な①区では人為的な土が施されていないことや、第28層の上面がほぼ水平になるように盛られていることから考えても、ある程度の水平な面を確保するために部分的な盛土をおこなったと判断できる。したがって、これらの層は墳丘構築当初の作業面ではないかと考える。(石貫)

b トレンチ（第5図、図版8-a）

b トレンチは墳丘の仮定主軸に直交し、P28を通るラインの南側に設定した南北6.0m×東西0.5mのトレンチである。このトレンチは墳丘斜面における墳丘の範囲と平面形態、貼石の有無と、その状況などを明らかにするために設定した。

層 位 トレンチの北側では墳丘内の土層の状況が確認できた。第28層はキビ土ブロックを含む黒褐色土層で、先述したようにaトレンチ②区でみられた第28層と対応する。第27層は黒ボク土ブロックを含む黒褐色土層である。この土層は墳丘外に向かって緩やかに傾斜するように堆積している。したがって、この層は墳丘斜面の盛土と考えられる。

第3層は黒褐色土層で、キビ土のブロックが混入している。この層はaトレンチでも確



第5図 b トレンチ平面図・立面図・断面図・エレベーション図

認された土層で、b トレンチでは墳丘外に向かって緩やかに傾斜して堆積している。墳丘斜面上には板石材があり、この板石材の設置角度は墳丘斜面の第3層と対応することから、これらの板石材は貼石と考えられる。第3層の上面は墳丘斜面の貼石によって分断されているが、墳裾の傾斜変換点でも確認することができた。このことから、第3層で墳丘全体を覆ったのちに、この層を掘り込んで貼石を施していることがわかる。ただし、貼石を設置するために第3層以下を掘り込んだ痕跡は確認できなかった。また、第27層、第28層も同様に貼石を設置する前に築成されたものであることが判明した。

第16層もa トレンチで確認できた土層である。第29層は黒褐色土層で、第16層や第30層（a トレンチ②区東壁で確認、付表1に記載）との境界が不明瞭で、分層ができなかった。また、第29層の下からはキビ土の地山層を検出したが、この地山層と第29層との境界も不明瞭であることから、第16層から下を自然堆積層であると判断した。

さらに、貼石直上から墳丘外にかけての位置では、表土層（第1層）より下に第78層、第79層、第80層が堆積している。これらの層は墳丘斜面から墳丘外に向かって徐々に厚い堆積を示すことから、墳丘盛土の流土層と判断した。流土層は最大で約0.45 mの厚さをもつ。流土層の直下から地山層が現れる。地山層は明黄褐色の土層で、この土を削りだし墳裾と墳丘外の平坦面を造成している。

遺 構 墳丘斜面の流土層の直下から貼石を検出した。残存状況は良好である。貼石は扁平な板石と川原石を用いている。トレンチの東壁にかかる貼石のうち、墳裾寄りの板石は傾斜が30度未満の緩やかなものとなっているが、その上の板石の傾斜は約60度とかなり急である。これは他のトレンチで検出した2段目貼石の傾斜と比べてもやや急である。

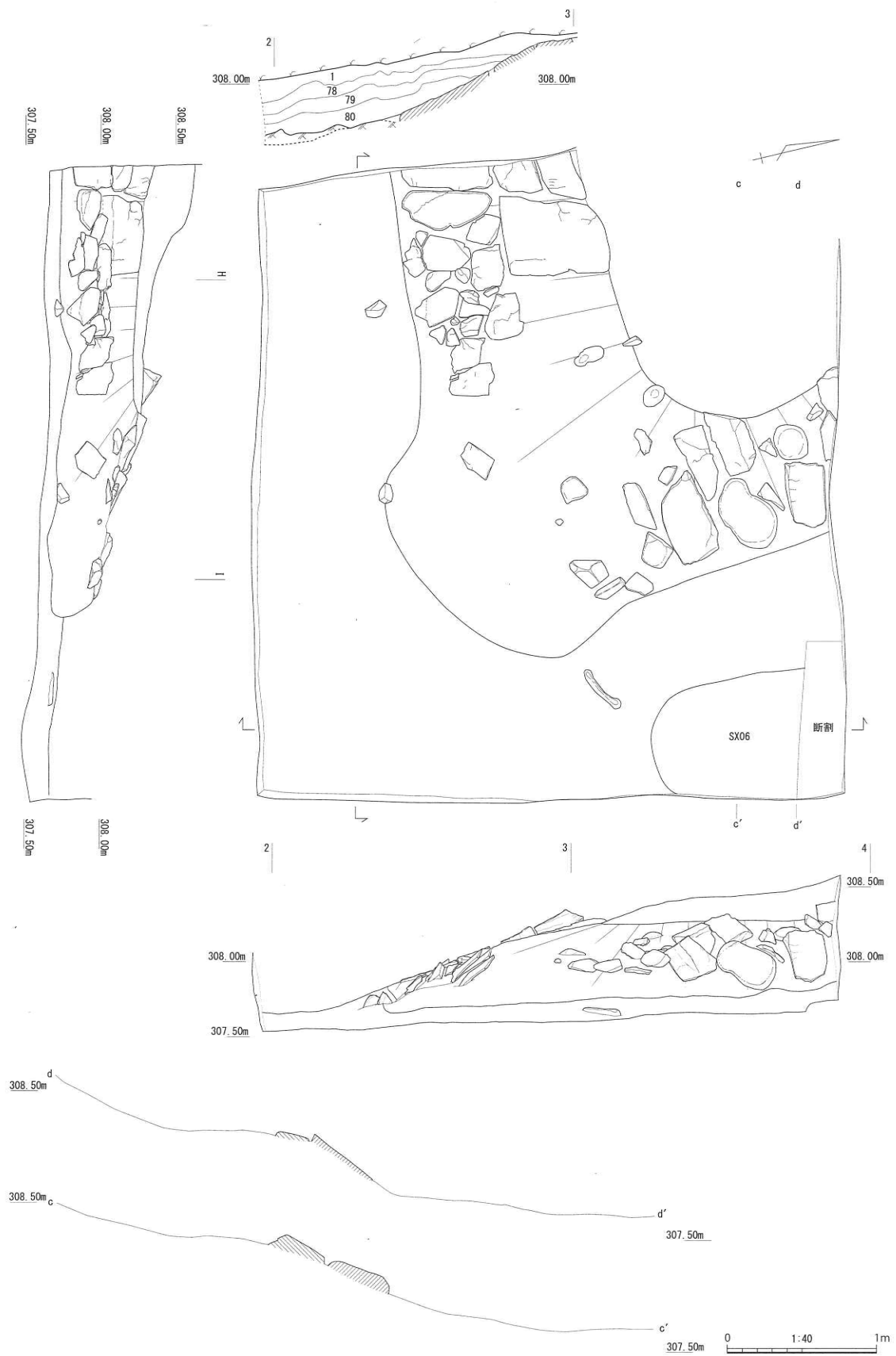
遺 物 流土層の第80層から高杯形土器の脚部片が出土した。 (石貫)

c トレンチ（第6図、図版8-b）

c トレンチは、平成9年度の試掘調査において検出された南東隅隅の突出部を再度検出し、突出部の形状と墳丘の規模を確認することを目的として設定した。まず、a トレンチ③区に接するかたちで東西4.0 m×南北4.0 mの範囲でトレンチを設定した。またトレンチの西壁の一部は貼石の検出のため、西側に0.2 m程度拡張した。なお、c トレンチの北壁は切り株のため墳丘の仮定主軸からおよそ0.3 m南にずらして設定した。しかし、北壁は試掘の埋土であったため、土層の観察は行なうことができなかった。

層 位 トレンチの北壁は、試掘の際に埋め戻された土であり、下記のSX06以外は土層の観察を行なうことができなかったため、トレンチの西壁を観察面にあてた。表土層の下から、墳丘から緩やかに傾斜し、墳丘外に向かって厚みを増し堆積する土層を検出した。この層は3つ（第78層・第79層・第80層）に分層でき、b トレンチで検出した流土層と同じ層であると確認した。流土の堆積状況やその直下から地山層があらわれるといった状況はb トレンチと同じである。

遺 構 南東隅角部を構成する2面の斜面貼石は隅角に向かうにしたがって鋭角に交わるような配置をとる。また、隅角の稜線付近に遺存した石材の位置から隅角部がやや突出し



第6図 c トレンチ平面図・立面図・断面図・エレベーション図

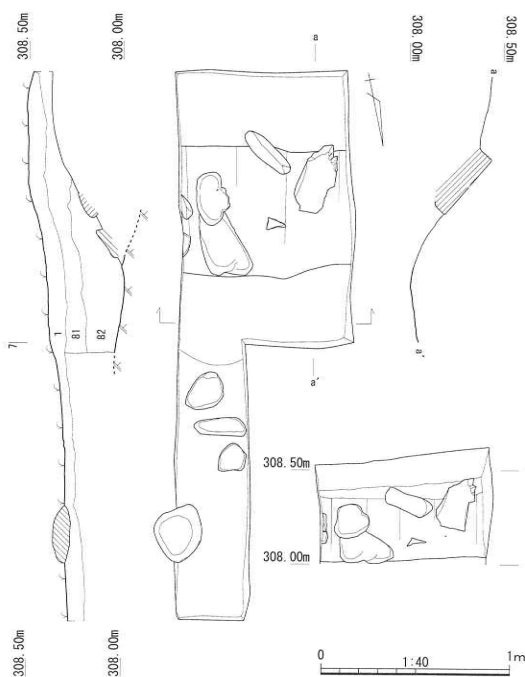
て盛土がおこなわれていた様相がうかがえる。このことから南東隅角部は突出する形態をもっていたものといえる。この突出部は貼石の残存状態が良好ではないが、扁平な板石と川原石を貼石に用いてほぼ2段に貼りめぐらされている。斜面の傾斜は比較的緩やかで、貼石の傾斜もおおむね30度未満である。貼石には0.5～0.7 mの大きさの石材が多く、他のトレンチで検出した貼石よりも大きな石材を用いる傾向にある。東側斜面ではほぼ同じ大きさの貼石が2段に貼られているが、南側斜面では大小の貼石が2・3段に貼られ、貼石の貼り方に差異が認められる。トレンチの北東部で性格不明の遺構（SX06）を検出した。このSX06については後述する。

遺物 トレンチ内から土器片が2点出土しているが、いずれも細片で器種が特定可能なものはない。（辻村哲農）

d トレンチ（第7図、図版9-a）

d トレンチは墳丘の仮定主軸に直交し、P 28 を通るラインの北側に設定した。当初、南北1.5 m×東西1.0 mのトレンチを設定し、後に北側に南北1.5 m×東西0.4 mの範囲を拡張した。このトレンチは墳丘斜面における墳丘の範囲と平面形態、貼石の状況などを明らかにするために設定した。貼石と墳裾を検出した。裾部はトレンチ南端から約1.0 mに位置する。

層位 墳丘全体を覆う盛土である第3層は墳丘外に向かって緩やかに傾斜するように堆積している。その斜面上に石材が埋め込まれており、貼石と考えられる。表土層（第1層）より下に第81層と第82層が堆積している。これらの層は墳丘外に向かって徐々に厚く堆積することから、墳丘盛土が流出した土層と考えられる。流土層は最大約0.4 mの厚さで、2つに分層できた。流土層の直下にはキビ土の地山層を確認した。



第7図 d トレンチ平面図・立面図・断面図・エレベーション図

遺構 墳丘斜面からは貼石を検出した。貼石は板石と川原石を用いている。貼石の傾斜は30度前後である。北側に拡張した部分からは、原位置を留めない数個の川原石がみられた。遺物の出土は認められなかった。（宮岡）

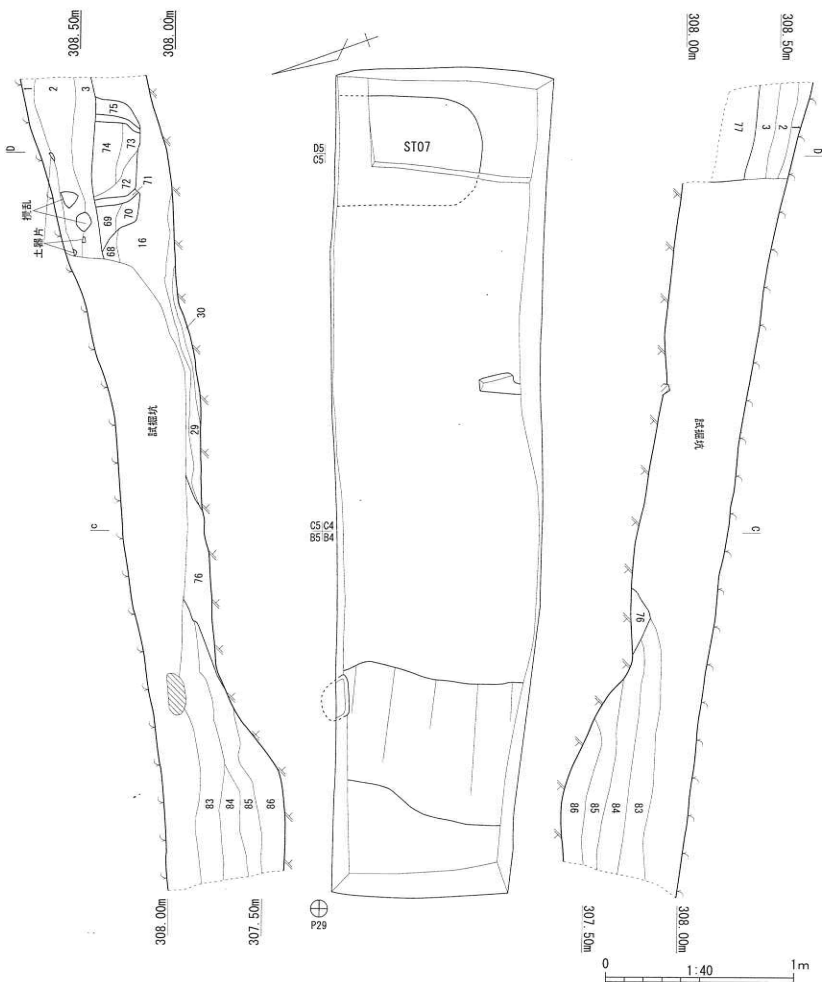
e トレンチ（第8図）

e トレンチは墳丘の仮定主軸上に平行し、P28とP29を結ぶライン上にa トレンチから西に2.0 m離れて位置する。このトレンチは試掘調査で確認された墳裾を再度検出し、c トレンチで検出された突出部と併せて墳丘の規模を確認するため、南北1.5 m×東西4.5 mの範囲で設定した。

層位 北壁の第2層は褐色土層で、aトレンチで確認された第2層と同じ土層である。第3層もaトレンチで確認されたものと同じで、墳丘全体を覆う盛土である。第16層はaトレンチおよびbトレンチで確認されたものと同じ土質であり、性格も同じ旧表土と判断した。第68層は明黄褐色土層で、試掘の際に掘削されているため広がりを確認することはできないが、旧表土（第16層）直上にあり、土色や土質も旧表土と明確に区別できることから墳丘斜面を形成する盛土の1単位と判断した。第29層はやや黄色混じりの黒ボク土、第30層は地山と黒ボク土の混じる層で、これらは地山層と旧表土に挟まれて堆積しており、土層の境界も不明瞭であることから地山から旧表土まで漸移的に変化する自然堆積層であると考えられる。第76層は黒褐色土層で、旧表土とは明らかに土質が異なり、地山の直上に堆積していることから第68層と同じく墳丘斜面の盛土の1単位と判断した。墳丘斜面から墳丘外にかけて、試掘の埋土の下部に流土層（第83層～第86層）が厚く堆積している。流土層は試掘の際に削られているが、現状で4つに分層できた。第86層直下には地山層を確認した。

南壁の土層も北壁と同様に大半が試掘の埋土層である。第1層から第3層までは北壁と同様の土質である。北壁の旧表土と同レベルに第77層があるが、土質が異なるため別層と判断した。黒褐色の砂質土である。第76層は一部分しか残存していないが、北壁の第76層と土質およびレベルも対応している。流土層は北壁でみられたものと同様の堆積である。

遺構 トレンチの西端で墳裾を確認した。墳丘斜面には貼石がみられず、地山を削り出してその上に若干の盛土を盛って墳丘斜面を形成している。地山の傾斜はトレンチの西端付近で平坦になり、その地点を墳裾と判断した。トレンチ北壁に0.2 m程度の大きさの円礫が存在しているが、



第8図 eトレンチ平面図・断面図・エレベーション図および墓墳ST07

これが墳丘に伴うものであったかどうかは不明である。また、トレンチ東端からおよそ 1.5 m の地点に角礫が存在するが、これは地山に食い込んでいることから墳丘築造当時からこの場所に位置していたものとみられる。

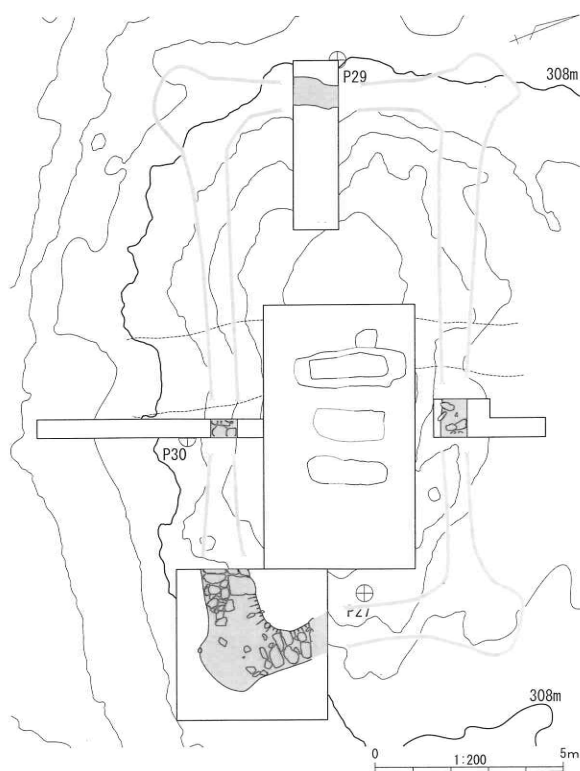
遺物 トレンチからは土器片が数点出土している。出土したのは甕形土器の底部（第 14 図 5）、高杯形土器（第 14 図 6・7・10）などで、後述する墓壙 ST07 上からほぼ集中して出土している。ただ、これらは第 1 層（表土）付近からの出土が多く、原位置を保っていない可能性が高い。（辻村）

（４）墳丘の規模・構造とその築造状況の復元（第 9 図）

まず、墳丘の規模であるが、佐田峠 3 号墓は墳丘測量調査の結果、東西約 16.5 m、南北約 10 m の四隅突出型墳丘墓の可能性が高い方形墳丘墓としていた。今回の発掘調査でより正確な墳丘規模が確定し、東西約 15 m、南北約 7 m の長い長方形の平面形を呈する四隅突出型墳丘墓であることが判明した。墳丘の周囲の斜面には、板状の貼石がほぼ 2 段から 3 段に貼りめぐられており、丘陵頂部に位置する独立した墳丘墓として築造されていた。

突出部は若干ではあるが隅部でくびれ、外に向かってふくらむような形で造成されている。いわゆる「しゃもじ形」とまではいかないが、イメージとしてはそれに近い形状で、佐田谷 1 号墓のそれと類似する。

つぎに、墳丘の構築過程を復元する。3 号墓を築造するにあたり、墳裾から墳丘外に相当する部分は旧表土面を地山面（キビ土）まで掘り下げたと考えられる。そのあと、地山面を削り出して、墳裾となる部分を造成する。このとき、旧表土面（第 16 層）も墳丘内部に向



第 9 図 墳丘の規模・構造とその築造状況の復元

かって緩やかに登るように傾斜をつけて削り、墳丘斜面となる部分の基礎とする（第 12 図 - a）。続いて、墳丘内で高さが足りない部分に盛土（第 28 層など、付表 1 に記載）を施し、墳丘平坦面の形状を整える（第 12 図 - b）。後述するように、整地した平坦面から墓壙を掘り込んで、墳丘内の 5 基の埋葬が完了したあと、墳丘全体を盛土（第 3 層）で覆う（第 12 図 - i）。盛土で墳丘全体を覆ったのち、2 段から 3 段の貼石を斜面に貼りつけた。盛土と墳丘斜面の貼石の関係については、1 段目の貼石の下から盛土層と同じ土質の土層を検出したことから、盛土層が貼石によって分断されているものの、もとは同一層であったといえる。つまり、盛土層に石材を「埋め込んだ」ために土層が分断されたものと考えら

れる。したがって、墳丘斜面の貼石は墳丘築造の最後の工程であったことがわかる。（石貫）

4. 埋葬施設・遺構の構造

遺構番号は遺構の性格に関係なく、検出順に 01、02、03 と番号とした。

（1）SX01（第 10 図、図版 9－b）

SX01 は a トレンチより検出された川原石を使った石の配列である。検出当初は表土直下のため原位置を保っていない川原石と考えたが、それぞれ墳丘長軸に平行して列をなすかたちで位置していたことから、墳丘に伴うものであると判断した。SX01 は、そのほとんどが③・④区に位置しており、①・②区にも川原石がみられる。②・③区の南側では川原石がほぼ一直線に並んでおり、これらは墳丘斜面と平坦面との境界付近に位置する。いずれも第 3 層上面とほぼ同レベルにあり、埋葬を完了して盛土（第 3 層）で覆ったのちに設置されたものであろう。ただ、③区の墓壇 ST05 付近に位置している亜円礫は、レベルの比較から第 3 層よりも下層となる可能性が確認された。この亜円礫については他の川原石と異なる性格をもつとも考えられるが、他の川原石とともに墳丘長軸に平行して列をなしているため、SX01 の一部として扱った。

②・③区南側の配列は、墳丘平坦面の境界付近に並んでいることから、墳丘の平坦面の境界を示す可能性がある。墓壇上やその周辺に位置する川原石については、墓壇の標石としての性格をもつと考えることもできるが、いずれも墳丘の盛土である第 3 層上面に位置しており、佐田谷 1 号墓で確認された標石のように墓壇に伴って設置されたものではなく、墓壇を意識した配置ではないことから、これらが墓壇の位置を示すような標石であるとは考えにくい。ほぼ同一のレベルに位置していることや一列に並ぶような配置であることからみて、これらは墓標石とは異なる性格をもった遺構の可能性が高い。（小林・辻村）

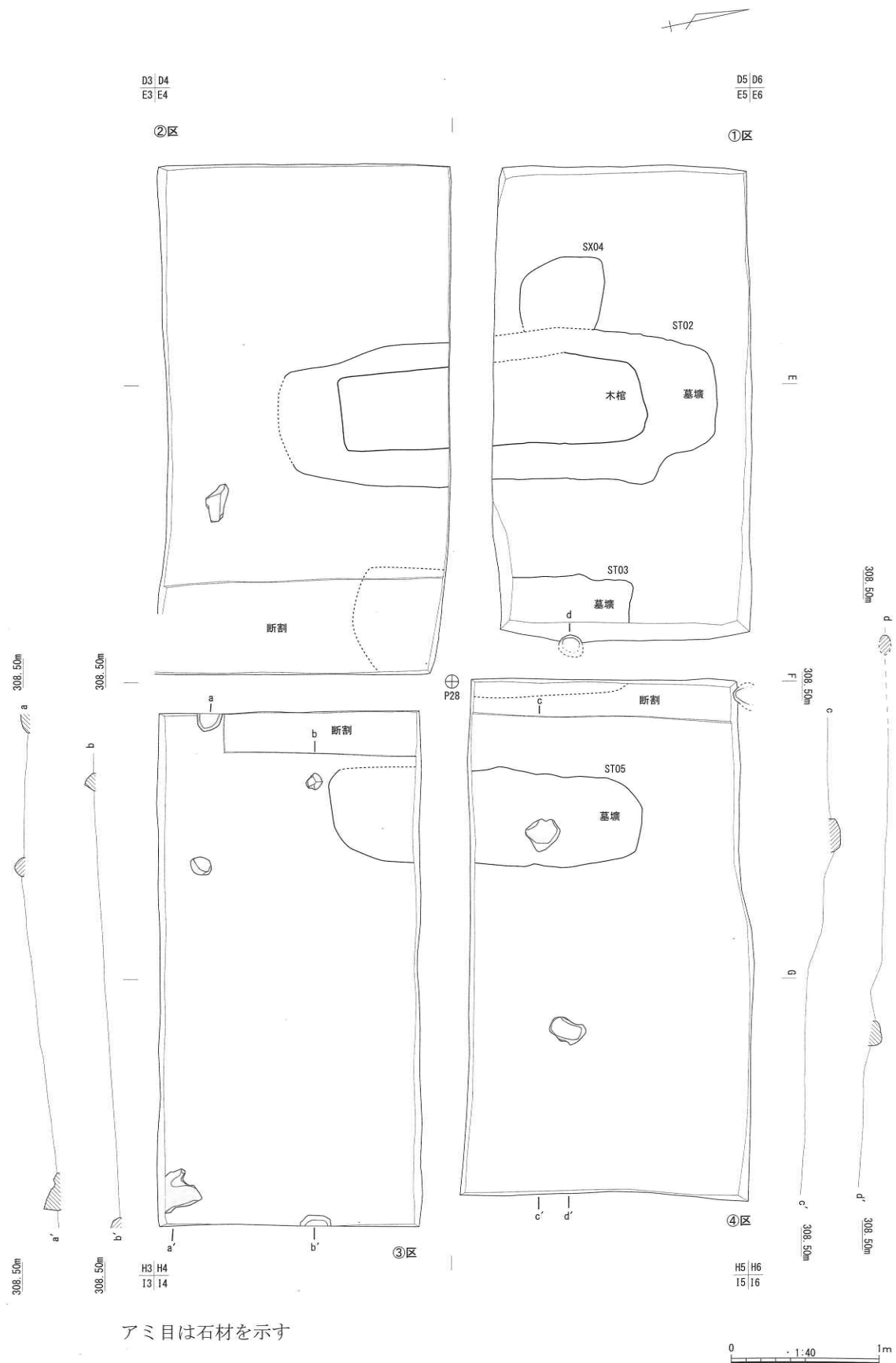
（2）埋葬施設の検出状況

墓壇 ST02（第 11 図、図版 10－a）

ST02 は a トレンチ①・②区で検出した。検出過程で墓壇上面を認識することができなかったため、検出面として提示しているプランは本来の墓壇上面から 0.06～0.15 m 程度下の面であり、その規模は長さ 2.64 m、最大幅 1.15 m である。加えて、第 11 図で示した墓壇の平面プランが畦を挟んだ①区と②区で整合しないのは、それぞれの区で墓壇を検出したレベルが異なってしまったためである。①区の検出面が若干高い。

先述したように、墓壇は旧表土面（第 16 層）から掘り込んでおり、旧表土面を水平にするために盛土を施したのは、墓壇を掘り込む前に墳丘内を整える作業をおこなったためである。

旧表土層である第 16 層を掘り込んで墓壇を造成している。墓壇底は地山面に達している。墓壇を造成した後、木棺を設置する。第 13 層が木棺の痕跡で、部位は長側板と考えている。この層は黒褐色土層で、粒子が細かく均質な色調である。棺を設置した後、裏込め土（第 8 層・第 9 層・第 10 層・第 11 層・第 12 層）を入れている。裏込め土は、まず第 12 層である、

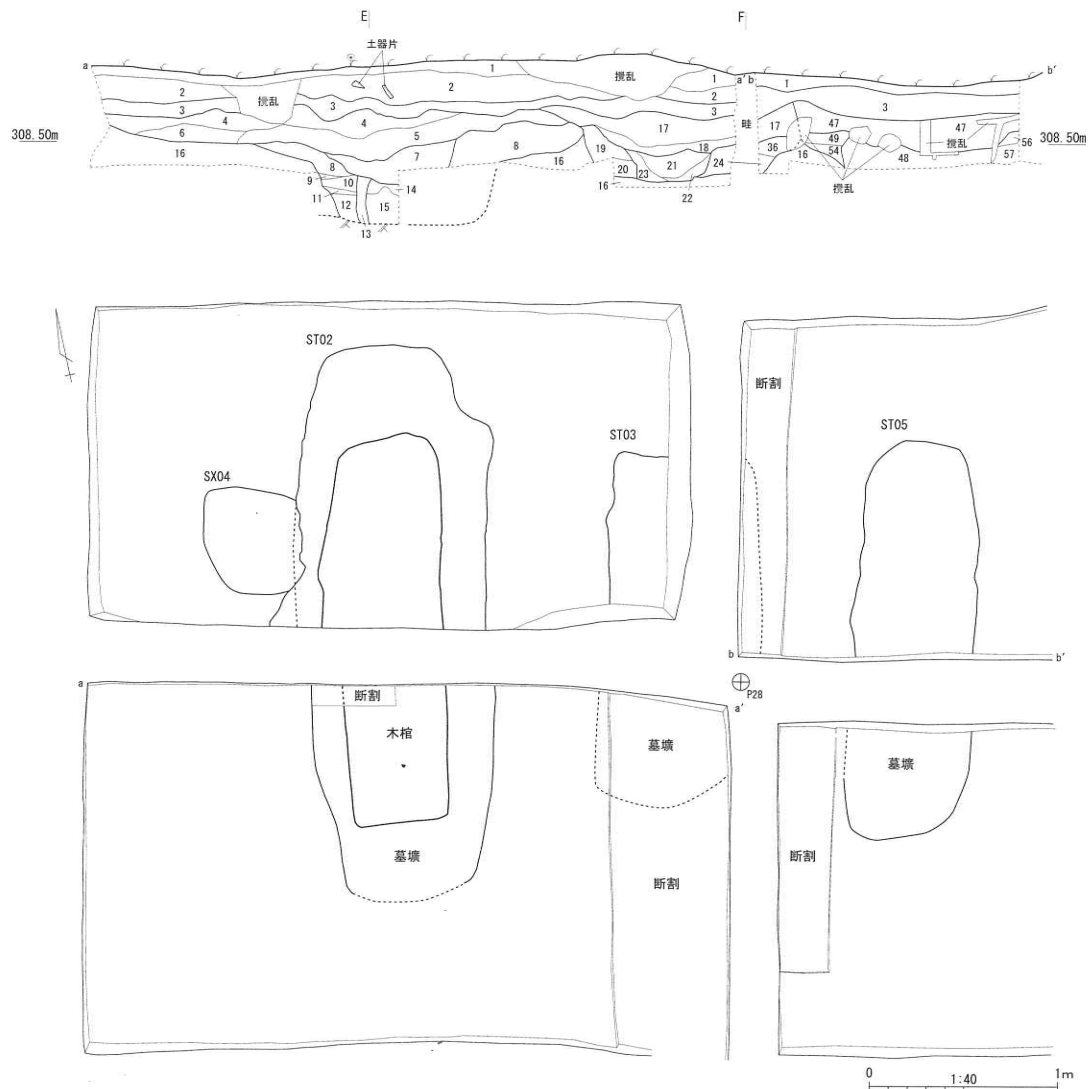


第10図 SX01

黒ボク土とキビ土のブロックの混入した黒褐色土を入れる。次に、ブロックの混入しない黒褐色土層の第11層を薄く敷き詰める。その上に第10層（第12層と同質の土層）を入れる。そして、第11層と同質の第9層を薄く敷き、その上に第8層（第12層と同質）を入れている。つまり、土質の異なる土を交互に詰め込んでいる状況がうかがえる。

裏込め土を詰め込んだのちに、第7層（黒褐色土層、黒ボク土ブロック、キビ土ブロックが混ざる）で棺を覆っている。なお、第7層は堆積の状況から棺蓋となる部分と棺の封土とを分層できると思われるが、明確に分離できなかったため、第7層として一括した。続く、第4層・第5層・第6層は墓壇も含めてST02全体を覆う土である。

木棺の規模は長さ1.74 m、最大幅0.64 mである。棺の深さは0.3 m程度で、厚みは約0.07 mである。ST02は3号墓最大の埋葬施設であることが判明した。また、墳丘平坦面の中心に位置することからも3号墓の中心埋葬であったといえる。木棺については、平面プランの確認とaトレンチ②区北壁沿いに長さ0.4 m×幅0.1 mの断割を入ただけなので詳しい構造は不明である。平面プランの確認では長側板が小口板の位置から突き出してはいなかった。



第11図 墓壇 ST02・ST03・ST05・SX04

小口板を長側板で挟み込んだ形状ではなく、箱形の木棺であった可能性が高い。ただし、棺蓋の痕跡は確認できなかったが、棺上に堆積した土層から推測すると、棺蓋が存在した可能性は高い。また、棺内の一部を墓壙底まで掘り下げたが、底板の痕跡は確認できなかった。

なお、ST02 の直上、第 2 層から土器片が集中して出土していた。器種は脚台付鉢形土器（第 15 図 12）、甕形土器（第 14 図 1～3）、高杯形土器（第 14 図 8）である。その後、ST02 の墓壙を検出し、土器片のほとんどがその上面からの出土であると判明した。中には第 3 層上面のものもあり、おそらくこれらの土器片は 3 号墓において最終埋葬を執り行い、全体を盛土（第 3 層）で覆ったのちに置かれたようであり、そのほとんどが原位置付近であったものと想定できる。（石貫）

墓壙 ST03（第 11 図）

ST03 は a トレンチ①・②・③・④区で検出した。ST02 と同様に検出過程で墓壙上面を認識することができず、一部を断割によって確認せざるをえなかった。よって、検出面として提示しているプランはほぼ墓壙底に近い面であり、その規模は長さ 0.80 m、最大幅 0.31 m である。墓壙は ST02 の封土層（第 5 層）上面から掘り込んでいる。

墓壙は ST02 の封土（第 5 層）から掘り込んでおり、墓壙底は旧表土層（第 16 層）でとまっている。木棺痕跡は認識できなかったが、裏込め土があり、棺内側はほぼ垂直に堆積しているため木棺が存在した可能性が高い。裏込め土は第 19 層、第 20 層、第 24 層、第 36 層である。棺を設置したあと、長側板の裏に第 20 層と第 24 層をそれぞれ詰め込み、第 19 層を第 20 層の上に、第 36 層を第 24 層の上に乗せている。色調の異なる土を互層状に施す ST02 の裏込めのような丁寧な構造ではない。第 21 層、第 22 層、第 23 層は棺内に流入した土である。第 22 層と第 23 層は長側板の痕跡を含んだ層の可能性も考えたが、流入土と木棺痕跡を見分けることができなかった。第 18 層は棺の封土で、堆積の状況から棺蓋があった可能性が考えられるが、長側板と同様に棺蓋も確認できなかった。第 17 層は ST03 の封土である。

木棺の規模は壁面から推定すると、長さ 1.65 m、最大幅 0.45 m、深さ 0.2 m 程度である。木棺の構造については不明である。（石貫）

墓壙 ST05（第 11 図、図版 10 - b）

ST05 は a トレンチ③・④区で検出した。ST02・ST03 と同様に検出過程で墓壙上面を確認することができず、検出面として提示しているプランはほぼ墓壙底に近い面である。その規模は長さ 2.15 m、最大幅 0.67 m である。墓壙は ST03 の封土（第 17 層）上面から掘り込んでおり、ST03 よりも新しい埋葬施設である。

墓壙は ST03 の封土である第 17 層から掘り込む。ST05 は④区で平面的に確認したが、③区では確認できず、その一部を壁面でしか確認できなかった。このため、平面的な墓壙の検出は 0.10～0.15 m ほど掘削したレベルとならざるをえなかった。裏込め土に相当する土層（第 49 層・第 54 層）が存在することから、本来は木棺があったと推定できる。これらの層は水平な堆積をしていることから、棺の設置に伴って裏込めしたことを示す根拠となりうる。第 48 層は棺内の流入土、棺蓋、木棺封土となる部分の埋土層である。その性格の異なる

る3つに分層することができず、1つの層としてまとめた。第47層はST05全体を覆う封土である。

木棺の規模は長軸方向は不明瞭であるが、最大幅0.50 mで、深さは0.20 m程度である。木棺の構造については、痕跡を認識できなかったため、不明である。ただし、裏込め土に相当する土層があることから、木棺が存在した可能性は高い。（石貫）

墓墳 SX04（第11図）

SX04はaトレンチ①区で検出した。ST02の西側墓墳埋土を掘削している。平面形状は不整形円で、規模は径0.50 m程度である。上面検出にとどめたため、この遺構の性格は不明であるが、小児埋葬の可能性が高い。（石貫）

墓墳 ST07（第8図、図版11-a）

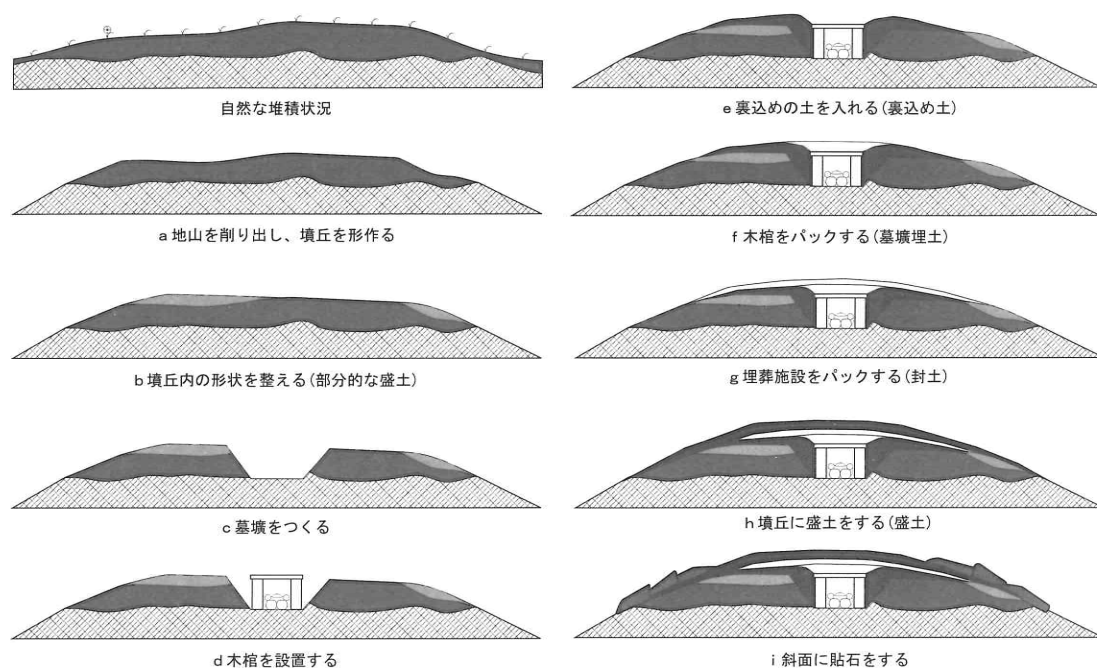
ST07はeトレンチの東端に近い位置で検出された。検出過程で墓墳上面を認識できなかったため、墓墳の正確な規模は不明である。

墓墳は東側では旧表土（第16層）上面から掘り込んでおり、西側では旧表土直上の第68層から掘り込まれている。裏込め土は東側では1層、西側では2層に分けて詰め込んでおり、東側の裏込め土はキビ土のブロック、西側の裏込め土の第70層は黒ボクのブロックを含んでいる。ST07の西側では木棺の長側板痕跡を確認したが、東側では対応する長側板痕跡を確認することはできなかった。棺内の埋土は3つに分層した。第72層は西側から流れ込むような形で堆積しており、その後第73層、第74層の順で堆積したものと考えられる。ST07は第3層の直下に位置しており、またST05が第3層の直下に掘り込まれていることから、ST07はST05とほぼ同時期の墓墳であるといえる。ただ、ST07の木棺痕跡と第3層の間には封土に当たる土層が存在しないが、第3層が封土の役割を兼ねていたと考えられ、この点においてはST05上の第3層と性格の差が認められる。（辻村）

（4）埋葬過程の復元（第12図）

まず、ST02の構築過程の復元を試みる。墓墳は旧表土面の黒ボク土（第16層）から掘り込んでいることがわかった（第12図-c）。墓墳を掘り込んだのちに、棺を設置し（第12図-d）、それから棺と墓墳の間に裏込め土を数回に分けて入れる（第12図-e）。続いて、棺蓋を覆う土を被せる（第12図-f）。ただし、棺蓋は認識できなかった。そのあと、ST02全体を覆う封土を施して（第12図-g）、ST02の埋葬行為を完了させている。この順序は、他の埋葬施設においても基本的には同じである。全ての埋葬行為が完了したあと、墳丘全体を盛土（第3層）で覆う。

つぎに、墓墳の構築技法に関して佐田谷1号墓との比較をおこなってみる。まず、佐田谷1号墓は丘陵を削り出したのちに盛土を施し、墳丘を造成する（妹尾1987）。墓墳の構築は造成した盛土面から掘込む掘込墓墳で、和田氏の分類によるところの「掘込墓墳a類」である。この掘込墓墳には盛土終了後に墓墳を掘り込む「掘込墓墳a類」のほか、盛土の途中で掘り込む「掘込墓墳b類」と盛土前に地山に直接掘り込む「掘込墓墳c類」がある（和田1989、2003）。一方、佐田峠3号墓の墓墳構築は丘陵の一部を削りだし、墳丘内の旧表土面に整地

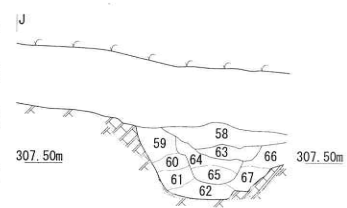


第12図 ST02 の埋葬過程の復元

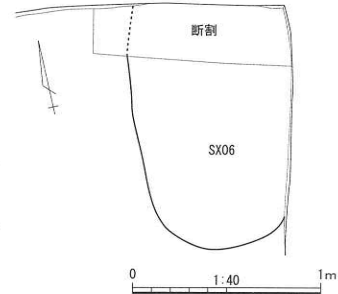
のための盛土を施したのちに、墓壇を掘り込む「掘込墓壇b類」である。和田氏は弥生墳丘墓の墓壇構築について、方形周溝墓は「掘込墓壇a類」が基本で、台状墓は「掘込墓壇b類」、「掘込墓壇c類」が基本であると推測し、木槨や石槨をもつもので「掘込墓壇a類」であるものは極めて少なく、佐田谷1号墓はその周囲に周溝がめぐることから方形周溝墓の要素と複合した結果であるという（和田 2003、5～6頁）。しかし、三次市に所在する宗祐池西1号墓（尾本原 2000）や陣山2号墓（落田 1996）などの初期四隅突出型墳丘墓の墓壇構築は地山面を削り出し、そこに墓壇を掘り込む「掘込墓壇c類」とみられる。墓壇構築技法を三次・庄原地域でみると、この地域における四隅突出型墳丘墓の墓壇構築技法が「掘込墓壇c類」から「掘込墓壇b類」、そして「掘込墓壇a類」へという段階的な変化をしたと指摘できる。

つづいて、埋葬施設の構築順序であるが、最初にST02を構築する。ST03はST02全体を覆う封土を掘削して墓壇をつくる。ST02と同様の順序でST03を造る。ST05はST03の封土を再掘削して構築するという過程が土層の切り合い関係から判断できる。ただし、ST05はST02・ST03とは異なり、埋葬施設を覆う封土が墳丘全体を覆う盛土となっている。また、ST07は少し離れた位置にあり、先述の3基のような明確な前後関係は不明である。しかし、ST07を覆う封土はST05と同じであることは、ST02とST03が示す在り方との違いとして注目できる。つまり、ST02とST03は埋葬施設を覆う封土を単独でもち、ST05とST07には墳丘全体を覆う盛土を埋葬施設の封土としているという違いである。その構造上の違いと、ST05がST03の封土を再掘削して構築していることの2点から推測すると、この2基の埋葬の前後関係は不明であるものの、ST02とST03よりは新しいということがいえる。埋葬施設をすべて構築したのちに、墳丘全体を覆う盛土（第3層）を施して（第12図-h）、一連の埋葬行為を完了させていることが判明した。このあと、斜面に板石を貼る（第12図-i）。

なお貼石についてであるが、佐田谷1号墓は墳裾部に設置された列石と墳丘斜面の貼石によって区画、造成されるが、佐田峠3号墓は墳丘斜面の貼石だけである。佐田谷1号墓では埋葬施設と貼石を設置するときの前後関係は不明であるが、墳丘盛土に石材を埋め込んでいる点で両墳墓に共通点をみてとれる。



(石貫)



第13図 土坑 SX06

(5) 墳丘外の遺構

土坑 SX06 (第13図、図版11-b)

SX06はcトレンチの北東部で検出した。このSX06は試掘調査においても確認された遺構で、当時から土坑として認識されていたようである。今回検出した範囲は試掘調査の範囲とほとんど変わらず、全体的に確認することはできなかった。現状での検出値は長さが約1.30m、幅が約0.95mである。

層位 SX06は地山面から掘り込まれている。トレンチ北壁に沿って長さ1.0m×幅0.3mの断割を設定して壁面の観察をおこなった。第59層から第62層・第66層まで埋めて作業面を形成した後に土坑を掘り、第65層→第64層→第63層→第58層の順で土坑が埋められたものとみられる。墳丘外に設置された埋葬施設の可能性もあるが、木棺痕跡などはみられない。土坑の上部の土が試掘の際に掘削されているため、墳丘流土との前後関係については不明である。

(辻村)

5. 出土遺物

(1) 土器 (第14図、第15図、図版12)

佐田峠3号墓からは100点以上の土器片が出土したが、すべて破片資料である完形に復元しうるものはない。また個体数そのものも少なく、図化しえたものはわずかに15個体であり、甕形土器が5点、高杯形土器が6点、脚台付鉢形土器が1点、器種不明の土器片が3点である。以下に各資料について報告をおこなう。

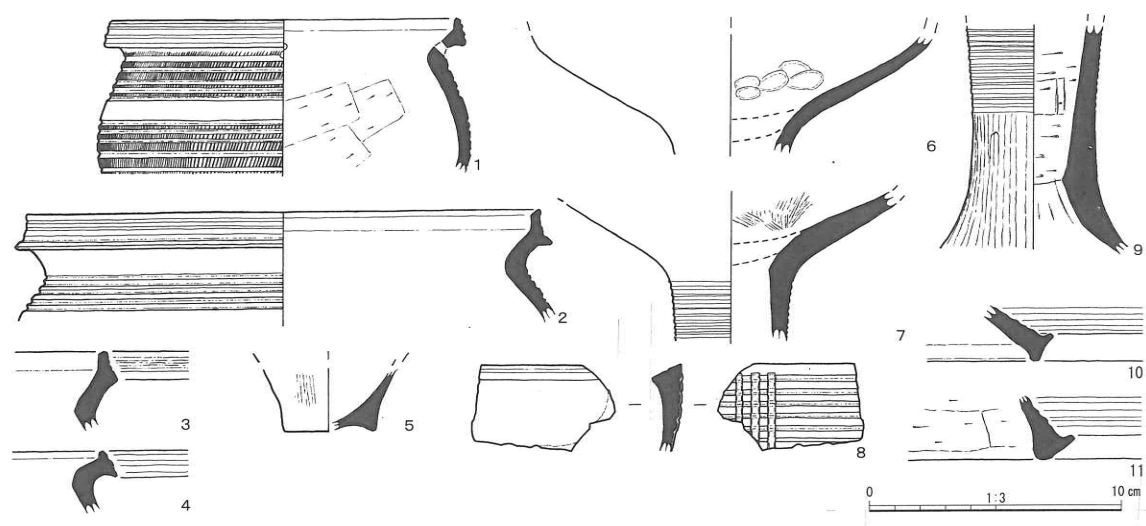
甕形土器 (第14図1～5)

1はaトレンチ①区から出土したもので、口縁部から胴部にかけて残存する。口径は13.4cm、胴部最大径は14.6cmに復元しうる。若干張り気味の胴部をもち、口縁部はく字状に外反して口縁端部が上方に拡張される。拡張された口縁端面には3条の凹線文がめぐり、肩部には右上がりの細い刻目が施され、そののちに5条の凹線文が施文される。さらに胴部にも同様に刻目および現状で5条の凹線文がめぐっている。外面は摩耗が著しく調整不明であるが、内面には肩部まで右上がりの方向にヘラケズリが施され、口縁部は横ナデにより仕上げられる。また、口縁部の断面に穿孔が1ヶ所みられるが、破損しているため孔径は計測不可能である。色調はにぶい黄橙色を呈し、0.5～1mm程度の石英・長石・雲母などが多く含まれている。2はaトレンチ①区から出土したもので、口縁部から肩部にかけて残存し、

口径は20.1 cmに復元しうる。口縁部はく字状に外反し、口縁端部が内傾気味に上下に拡張される。口縁端面にはやや浅い凹線文が3条めぐっており、肩部には5条の凹線文をめぐらせている。内外面ともに調整は横ナデにより仕上げられる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に0.5～1 mmの石英・長石・雲母などが多く含まれている。3・4は甕形土器の口縁部であるが、いずれも細片であるために口径を復元することはできない。3はaトレンチ①区から出土した。く字状に緩く外反する口縁部をもち、口縁端部が内傾気味に上方に拡張される。拡張された口縁端面には細く浅い凹線文が3条めぐっており、調整は内外面ともに横ナデ仕上げである。色調は黄橙色を呈し、胎土に0.5～1.5 mm程度の石英・長石・雲母などを含んでいる。4はbトレンチから出土したもので、口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下に拡張する。口縁端面には2条の凹線文がめぐり、調整は内外面ともに横ナデ仕上げである。色調は外面が褐灰色、内面がにぶい橙色を呈し、1 mm程度の石英・長石・雲母などを多く含んでいる。5はeトレンチ北壁より出土した甕形土器の底部で、底径は3.7 cmに復元しうる。底部からやや直立気味に立ち上がり、胴部に向けて緩やかに広がる。調整は外面に縦方向のハケののち底部に横ナデ、内面はナデにより仕上げられている。色調は外面が黒褐色、内面がにぶい黄橙色である。胎土には0.5～1 mmの石英・長石・雲母などが多く含まれる。

高杯形土器 (第14図6～11)

6はeトレンチから出土したもので、高杯形土器の杯部である。口縁部を欠くため、口径は不明である。杯部は体部が大きく広がりながら口縁部に向けて緩やかに湾曲するものとみられ、凹線文などの文様は確認できない。調整は外面をナデ、内面に指頭圧痕が残る。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰黄褐色を呈し、胎土に0.5 mm以下の石英・長石などが含まれている。7はeトレンチの表土中から出土したもので、杯部から柱部にかけての破片である。柱部には現状で9条の浅い凹線文がめぐっている。外面は摩耗が激しく調整不明であるが、杯部内面には多方向からのハケがみられる。杯部と柱部の接合には円盤充填法が用いられている。色調は外面および柱部内面がにぶい黄橙色、杯部内面が暗灰黄色で、胎土に0.5～1.5



第14図 佐田峠墳墓群C区3号墓出土土器実測図(1)

mm程度の石英・長石などを含んでいる。8はaトレンチ②区で出土した高杯形土器の口縁部であり、昨年度報告された高杯形土器（石貫・斉藤 2008、35 頁、第 18 図 8）の一部である。口縁部には凹線文が 6 条めぐらされており、棒状浮文が付加されている。この棒状浮文は昨年度の資料にはみられなかったもので、これにより昨年度の資料には円形浮文だけでなく棒状浮文も施されていることが明らかとなった。9はbトレンチで出土した柱部である。上部に浅い凹線文が現状で 13 条確認でき、縦方向のヘラミガキを施したのちに凹線文をめぐらせている。内面の調整は横方向のヘラケズリが施され、その下部にはシボリ痕が残る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に 0.5～1 mm程度の石英・長石・雲母などを含んでいる。また外面にはわずかに赤色顔料の付着がみられる。10・11 はいずれも脚部であるが、細片のため法量は不明である。どちらも外面に現状で 4 条の凹線文が確認できる。10はeトレンチより出土したもので、傾きは緩やかであり、脚部の接地面はやや肥厚して平坦面をもつ。脚端部は上方に跳ね上げるようにして拡張されている。器面調整は内外面ともにナデ、色調はにぶい橙色を呈し、胎土に 0.5 mm程度の石英・長石・雲母などを含んでいる。11はbトレンチから出土したもので、10に比べて傾きが急であり、脚端部が拡張されて接地面は丸みを帯びている。調整は外面にナデ、内面には横方向にヘラケズリが施される。色調はにぶい橙色を呈し、0.5～2 mm程度の石英・長石などを含む。

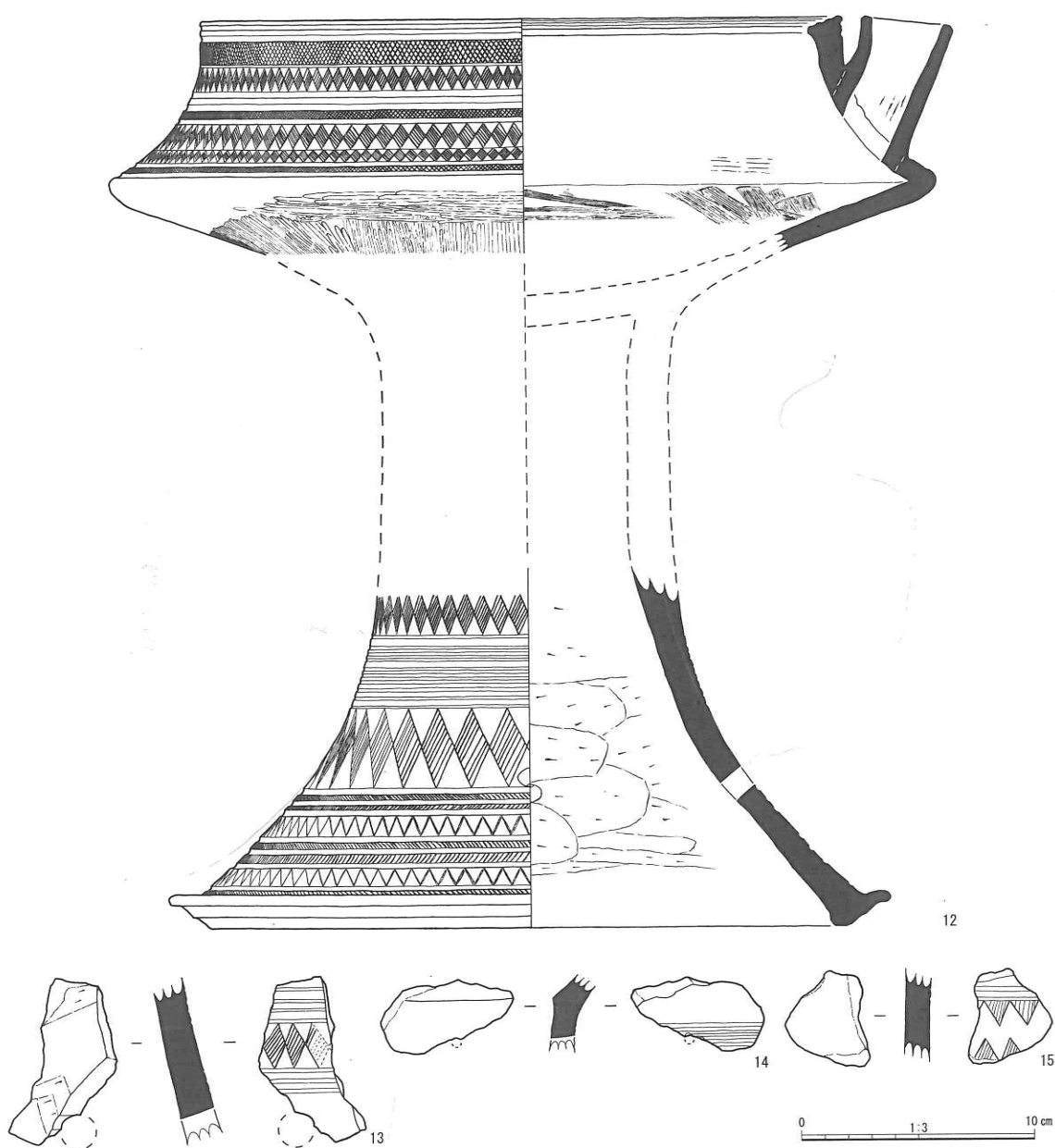
注口付き脚台付鉢形土器（第 15 図 12）

12は注口付きの脚台付鉢形土器で、aトレンチ①区および②区から破片の状態で出土した。今回の調査で出土した土器片の中でも最も数が多く、接合しないものも含めればその数は 50 点以上にのぼる。柱部を欠くが鉢部および脚部は比較的良好な状態で残存している。鉢部は胴部が強く張った算盤玉形を呈し、肩部に注口がやや傾きながら接合する。復元された法量は口縁部径 27.0 cm、胴部最大径 35.1 cm、脚部の底径 26.0 cmである。また注口部は完存し、口径は 3.7 cmである。注口は先端がやや広がり、断面はほぼ正円形を呈する。板状の粘土を丸めて整形しており、内面にはシボリ痕がみられる。口縁部は内傾して端部を若干肥厚させ、口縁端面に凹線文を 3 条めぐらせている。脚部は端部に向けて緩やかな弧を描きながら開き、接地面は若干肥厚して平坦面をもつ。端部は上方に跳ね上げる形で拡張されている。口縁部に凹線文が 2 条めぐり、肩部の文様は上から斜格子文→菱形文→やや浅い 2 条の凹線文→斜格子文→凹線文→大小 2 段の菱形文→凹線文→斜格子文→凹線文となっている。最下段の菱形文には一部文様の方向が異なる部分がみられ、内部の複線が右下がりであるのに対してこの部分は右上がりの複線が施文されている（第 16 図 6）。この方向の異なる文様がどの程度の範囲にめぐっているのかは不明であるが、この部分を境界として内部の複線の方向が異なっている可能性がある。脚部は鉢部と文様構成はやや異なり、菱形文以外に刻目・鋸歯文がみられる。脚部の文様は現状で上から菱形文→細く浅い 10 条の凹線文→大きめの菱形文→凹線文→右下がりの刻目→凹線文→右上がりの刻目→鋸歯文→凹線文→右下がりの刻目→凹線文→右上がりの刻目→凹線文→鋸歯文→凹線文→右下がりの刻目となる。刻目は凹線文を挟んで綾杉状に施文されている。斜格子文・菱形文・鋸歯文・刻目は直線的で、こ

これらの文様はいずれも工具を押し当てて施文したとみられる（第16図1～5）。また脚部には円孔が1ヶ所みられるが、破損のため孔の径は計測不能である。調整は胴部外面に縦方向のヘラミガキを施したのち横方向のヘラミガキ、肩部内面に横方向のハケを施したのち横ナデで仕上げ、胴部内面は横方向のハケののち右下がりのハケを施している。注口部は外面がナデ仕上げで、内面は摩耗が著しいために調整が不明である。脚部内面には横方向のヘラケズリが施されている。色調は鉢部が外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、脚部はともににぶい橙色を呈している。胎土中には0.5～3mm程度の石英・長石・雲母などを含んでいる。また、鉢部の外面にはわずかに赤色顔料の付着がみられる。

器種不明土器片（第15図13～15）

13・14は12の一部となる可能性もあるが、細片であり接合しないため器種および部位は



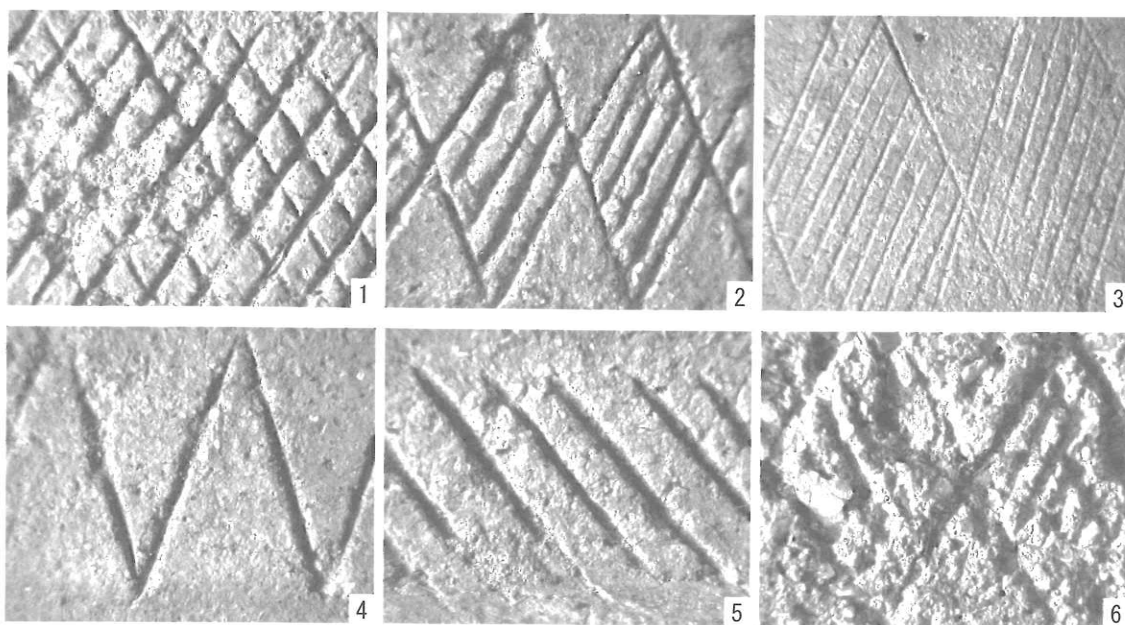
第15図 佐田峠墳墓群C区3号墓出土土器実測図（2）

不明として扱う。13はaトレンチ②区において出土したもので、12の脚部の一部と思われるが接合はしない。外面は摩耗しているが現状で7条の細い凹線文が施されており、凹線文に挟まれて菱形文が施文されている。また、1ヶ所円孔が穿たれているが、破損しているため形状や大きさは確認できない。調整は外面が摩耗しているため不明であるが、内面には横方向のヘラケズリが部分的にみられ、ナデにより仕上げている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土に0.5～1mm程度の石英・長石・雲母などを含んでいる。14はaトレンチ①区から出土したもので、12の鉢部と柱部の接合部の可能性がある。外面にはやや不明瞭だが、現状で4条の細い凹線文が確認できる。穿孔が1ヶ所みられるが、破損のために孔の形状や大きさは不明である。調整は内外面ともにナデにより仕上げられている。色調は橙色を呈し、胎土に0.5～1mm程度の石英・長石・雲母などが多く含まれている。15はcトレンチで出土したもので、文様は外面に現状で2条の凹線文および上下に複線鋸歯文が確認される。調整は内外面ともに摩耗のため不明である。色調は橙色で、胎土に0.5～1mm程度の石英・長石などが含まれる。 (辻村)

(2) 小結

今回の調査において出土した土器は、その大半がaトレンチ内から出土している。これらはST02の上面にほぼ集中しており、またST02以外の埋葬施設に付随する土器がみられなかったことから、これらの土器は3号墓の最終埋葬(ST05・ST07)を執り行った後、墳丘全体に及ぶ盛土で覆ったのちに、最初に設置されたST02上に置かれたものと考えられる。

上記の土器の中でも、とくに注口付きの脚台付鉢形土器は、四隅突出型墳丘墓からの数少ない出土例として重要である。同じく四隅突出型墳丘墓から出土したものとして、殿山38号墓(道上1987、61頁、第49図6)・佐田谷1号墓出土例(妹尾1987、23頁、第16図23)などが類例として挙げられる。3号墓出土のものはこれらの例と比較しても加飾性が極



第16図 12の鉢部・脚部文様の拡大写真

めて強く、確認されたものだけでも凹線文・斜格子文・菱形文・鋸歯文・刻目といった多様な文様が施されている。脚台付鉢形土器は時期が進むにつれて加飾性を次第に減じていく(妹尾 1992) ことから、この 3 号墓出土の注口付きの脚台付鉢形土器は少なくとも佐田谷 1 号墓よりも古い段階に位置付けることが可能であろう。形態的にみた場合、鉢部が算盤玉形を呈する点や口縁端部を肥厚させて端面に凹線文をめぐらす点などから戸宇大仙山遺跡 D 地点の例(松村 1979、59 頁、第 5 - 17 図 4)) が最も近いが、戸宇大仙山遺跡の例は注口が確認されておらず、また鉢部の文様構成も異なる。また、墳丘墓からの出土ではないが茜ヶ峠遺跡群(三枝・妹尾 1985) にも類例がある⁽²⁾。茜ヶ峠の例については器面の観察から鉢部の文様の施文方法が当遺跡のものと近いことが確認できた。また、塩町式の注口付き脚台付鉢形土器は工具で押し付けて施文しており、文様の割り付けもやや雑な印象をうける。当遺跡の例は施文方法や文様の丁寧さという点でいわゆる塩町式のものと異なり、どちらかといえば備後南部のものに近いようである。

甕形土器については 1 が肩部や胴部に刻目および凹線文をめぐらしており、刻目がやや不明瞭ではあるが、文様の構成において備後北部を中心に分布する塩町式土器の要素をもつものである。それに対し 2 は刻目をもたず凹線文のみを施しており、加飾性の減少という点から 1 よりも新しい段階に位置付けられる。時期的には 1 が弥生時代中期後葉から末葉、2 が後期初頭に位置するものと考えられる。高杯形土器については全形を窺いうる資料がないものの、8 は明瞭な凹線文をめぐらす点や加飾性において古い様相を留めており、1 と近い時期のものとして位置付けられよう。

以上から、注口付き脚台付鉢形土器については類例が乏しいために時期の比定は困難であるものの、鉢部および脚部の形態や加飾性が強いことなどからみて佐田谷 1 号墓よりも古く位置付けられるといえる。よって若干の不明確な部分はあるものの、3 号墓出土の土器は弥生時代中期末葉から後期初頭に位置付けられよう。(辻村)

6. 調査の成果

今回の発掘調査の結果、佐田峠 3 号墓は弥生時代中期末葉から後期初頭頃に築造された四隅突出型墳丘墓であることが判明した。昨年度の測量調査によって、3 号墓の墳丘規模は南北約 10.0 m、東西約 16.5 m、高さは南側が約 1.0 m、北側が約 0.4 m となり、東西に長い長方形を呈する方形墳丘墓と推定したが、今回の発掘調査によって、東西の全長(墳丘裾間)が 15.3 m、墳丘中央部の南北が 7.05 m の初期四隅突出型墳丘墓となることが判明した。

当初推定された墳丘規模よりも南北に 3 m ほど短いことがわかり、墳丘の長幅比がほぼ 2.2 前後となる、かなり細長いものであったといえる。三次・庄原地域の四隅突出型墳丘墓では、中期後葉の三次市陣山 2 号墓(落田 1996) の墳丘長幅比がおおよそ 2.1 となり、後期初頭とされる庄原市佐田谷 1 号墓(妹尾 1987) の長幅比はおおよそ 1.5 となることから、佐田峠 3 号墓の長幅比は陣山 2 号墓に近いものといえる。

また、墳丘の築造状況が判明したことも重要な調査成果であった。先述したように、旧表

土を整形し、数基の埋葬を行なった後に墳丘全体の盛土を施しており、墳丘構築後に墓壙が掘削されたわけではなかった。その後、墳丘全体の盛土を完成させ、墳頂部に川原石を置き、墳丘斜面部を再度整形して板石を貼ったのである。盛土の堆積状況から隅角の板石は最後に貼り込まれたものと見ることでできよう。埋葬施設の上に大きく盛土を行なう3号墓の構築状況は弥生時代中期、墳丘墓成立期のそれを示すものとみて差し支えないといえよう⁽³⁾。

佐田峠3号墓墳頂範囲で確認できた埋葬施設は5基（ST02～ST05・ST07）で、中心埋葬の墓壙（ST02）は全長3mを超えるものであった。当時としては大型の墓壙ではあるが、他のものと比べて突出する規模とまでは言いにくい。墳丘築造の契機となった被葬者の埋葬ではあるが、追葬者との社会的地位に著しい隔たりがあったとまで言い切ることはできない。後期前葉の佐田谷1号墓では、中心埋葬のために穿たれた墓壙は検出面で全長3.85m、幅3.23mと他の墓壙よりも突出して大きく、木棺・木槨構造を採用している。この点でも、佐田谷1号墓よりも古相を示している可能性が高いといえる。

しかし、墳丘の長軸方向と埋葬施設主軸方向の位置関係についてみると、佐田峠3号墓が弥生時代中期の属性だけを持つものではないことがわかる。弥生時代中期後葉の墳丘墓である三次市宗祐池西1号墓（尾本原2000）や陣山2号墓の埋葬施設（墓壙・木棺）は、墳丘長軸に平行して埋葬施設が設置されているのに対して、後期前葉の佐田谷1号墓では中心埋葬施設が墳丘長軸に直交している。佐田峠3号墓の埋葬施設も墳丘長軸に直交するという点で佐田谷1号墓に近く、墳丘長幅比と埋葬施設の方向という視点（池淵2007）からみれば、弥生時代中期末葉と後期初頭の間の墳墓といえるのである。

以上の点からすれば、四隅突出型墳丘墓は宗祐池西1号墓や陣山2号墓などに初現をなし、佐田峠3号墓から佐田谷1号墓へと形式的に変遷しつつ、発展していったことが推測され、出雲地方からの影響をことさら想定する必然性は認められないものといえる。

最後に注口付きの脚台付鉢形土器が出土したが、その施文の緻密さと正確な点では他例がなく、いわゆる塩町式の脚台付鉢形土器のそれとも異なるようである。3号墓の築造にともなって特別に製作されたものと思われる。今後類例の比較調査を行なっていきたいと考える。

（野島・石貫）

註

- (1) たとえばSX01の次はST02、ST03、SX04となる。これはSTやSX、またはSBといった遺構ごとにそれぞれ01という番号が重複することを避け、1つの遺跡の中で01という番号のついた遺構は1つしかないようにするためである。
- (2) 三枝・妹尾1985文献の83頁、第70図17、91頁、第78図147。これらは注口の存在は不明であり、文様構成も異なるが、鉢部の形態に佐田峠3号墓出土例と類似する点がみられる。将来備後南部での類例が増加すれば備後南部との関連性について論じることが可能となろう。
- (3) 平成20年度、鳥取県琴浦町で検出された弥生時代中期後葉の梅田萱峯墳丘墓でも、墓壙の掘削と木棺の埋置後に、盛土を行い、墳丘を構築している状況が判明している。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143 頁。
- 石貫弘泰・斉藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群（第 1 次）調査」『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』X XII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室、34～36 頁。
- 伊藤 実 1992 「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、156～195 頁。
- 伊藤 実 2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器ー四隅突出の思想とその背景ー」『考古論集ー川越哲志先生退官記念論文集ー』川越哲志先生退官記念事業会、375～398 頁。
- 稲垣寿彦編 1999 『妙見山遺跡』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2000 『広島県史跡 唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2001 『和田原C 地点遺跡発掘調査報告書』庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行編 2004 「和田原E 地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行 2005 『広島県史跡唐櫃古墳整備事業報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 落田正弘 1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。
- 尾本原勇人 1996 「宗祐池西遺跡について」『芸備』第 25 集、51～54 頁。
- 尾本原勇人 2000 『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会。
- 桑原隆博 1982a 「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗ー国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、31～50 頁。
- 桑原隆博 1982b 「西山遺跡」『西山・小和田・永宗ー国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、9～30 頁。
- 桑原隆博 1986 「四隅突出型方形墓覚書（1）ー備後北部を中心としてー」『芸備』第 17 集、1～16 頁。
- 桑原隆博 2000 「四隅突出型墳丘墓の出現と展開ー備後北部を中心としてー」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』大塚初重先生頌寿記念会、713～738 頁。
- 三枝健二・妹尾周三 1985 『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告ー県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査ー』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 39 集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター、37～106 頁。
- 沢元保夫 1982 「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗ー国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、51～70 頁。
- 潮見 浩 1958 「広島県庄原市鍛寄遺跡の調査」『私たちの考古学』第 5 巻第 1 号、1～12 頁。
- 潮見 浩 1974 「シカの絵のある弥生式土器」『考古学雑誌』第 60 巻第 2 号、73～81 頁。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会ー佐田谷 1 号墓の調査とその意義を中心としてー」『芸備』第 17 集、17～34 頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 63 集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 妹尾周三 1992 「注口付き脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第 14 集、95～115 頁。
- 妹尾周三 1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第 25 集、10～19 頁。
- 高橋彰子 1986 「庄原市矢崎古墳測量実習略報」『続トレンチ』第 6 巻第 4 号、1～12 頁。
- 田中清美 1997 「弥生時代の木槨と系譜」『堅田 直先生古希記念論文集』真陽社、109～127 頁。
- 田中裕貴 2003 「四隅突出型墳丘墓論」『博古研究』第 25 号、9～30 頁。
- 野島 永 1991 「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集』第 2 集、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、31～38 頁。

- 仁木 聡 2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、21～31頁。
- 広島大学測量実習参加学生一同 1982 「広政古墳群測量実習について」『続トレンチ』第6巻第1号、1～5頁。
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号、81～106頁。
- 藤田広幸 1988 『和田原遺跡』(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 藤野次史編 1983 『旧寺古墳群測量報告』広島大学文学部考古学研究室。
- 古瀬清秀 1991 「広島県」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、336～337頁。
- 古瀬清秀・竹広文明・野島 永 2008 「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XVII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、1～3頁。
- 松井和幸ほか編 1999 『和田原D地点遺跡発掘報告書』庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 松村昌彦 1979 「戸宇大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、広島県教育委員会、41～89頁。
- 道上康仁 1987 「殿山墳墓群の調査」『大判・上定・殿山—三次市大田幸町所在遺跡群の発掘調査—』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第57集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、54～66頁。
- 三次市教育委員会 1980 『宗祐池西遺跡現地説明会資料』。
- 吉川 正 1998 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』第15集、1～20頁。
- 渡辺貞幸 2003 「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
- 渡辺貞幸 2007 「まとめにかえて—四隅突出型墳丘墓概説—」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古代史復元』第6巻、講談社、105～109頁。
- 和田晴吾 2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究—葬制の比較研究—』平成11年度～平成13年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 課題番号11410108、3～29頁。

付表1 佐田峠墳墓群3号墓土層観察表

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	弱	3号墓の盛土に特有の黒ボク・キビ土ブロックの混入が無く、かなり練られた状態になっていることから、再堆積土の可能性が高い。	攪乱土
第3層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	やや弱	径0.1～0.3cm程度のキビ土ブロックを含む(約10%)。	盛土
第4層	黒褐色土	7.5YR 3/1	やや弱	強	径0.5～1.0cm程度の黒ボクブロック(30%)、径1.0～2.0cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST02封土
第5層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	強	径1.0～5.0cm程度の黒ボクブロック(30%)、径1.0～3.0cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST02封土
第6層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや強	やや弱	径0.5～1.0cm程度の黒ボクブロック(30%)、径2.0cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST02封土
第7層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	弱	径2.0cm程度の黒ボクブロック(40%)、径0.5cm程度のキビ土ブロック(40%)を含む。	ST02木棺の封土
第8層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	径0.5cm以下の黒ボクブロック(30%)、径3.0cm程度のキビ土ブロック(50%)を含む。他の層にくらべ、キビ土ブロックの量が多い。	ST02裏込め土
第9層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	均質な黒ボクの土。	ST02裏込め土
第10層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	第8層と同じ土。	ST02裏込め土
第11層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	第9層と同じ土。	ST02裏込め土
第12層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	第8層と同じ土。	ST02裏込め土
第13層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや弱	やや弱	均質な土。	ST02木棺痕跡
第14層	黒褐色土	7.5YR 2/2	弱	強	径0.5cm以下のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST02棺内埋土
第15層	暗褐色土	10YR 3/4	強	強	径0.1cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST02棺内埋土
第16層	黒色土	10YR 1.7/1	ほぼ無し	やや強	黒ボク土の旧表土層。	旧表土
第17層	暗褐色土	10YR 3/4	ほぼ無し	強	径2.0cm程度の黒ボクブロック(10%)、径0.5cm以下の黒ボクのブロック(30%)を含む。	ST03封土
第18層	暗褐色土	10YR 3/4	ほぼ無し	強	径1.0cm以下のキビ土ブロック(40%)を含む。	ST03木棺の封土
第19層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	径0.1cm程度の黒ボクブロック(30%)、径1.0cm以下のキビ土ブロック(40%)を含む。	ST03裏込め土
第20層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	径0.1cm程度の黒ボクブロック(10%以下)、径1.0cm程度のキビ土ブロック(50%)を含む。	ST03裏込め土
第21層	暗褐色土	10YR 3/3	やや弱	やや強	黒ボクブロックはほとんど含まない(0.5%以下)。径0.1cm程度のキビ土ブロック(40%)を含む。	ST03棺内埋土
第22層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや弱	径0.5cm以下のキビ土ブロック(20%)を含む。	ST03棺内埋土
第23層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや弱	径0.1cm以下のキビ土ブロック(10%以下)を含む。	ST03棺内埋土
第24層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや強	径0.5cm以下のキビ土ブロック(10%)を含む。	ST03裏込め土
第25層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	径0.5cm以下の黒ボクブロック(30%)、径1.0～3.0cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。	ST03封土
第26層	黒褐色土	10YR 2/3	やや弱	やや強	径3.0cm～5.0cm程度の黒ボクブロック(50%)、径1.0～2.0cm程度のキビ土ブロック(30%)を含む。墓壙を掘り込む前に墳丘を整地するための盛土。	整地土
第27層	黒褐色土	7.5YR 3/2	弱	やや強	径0.1cm以下の黒ボクブロック(40%)を含む。	盛土
第28層	黒色土	10YR 1.7/1	弱	やや強	径0.1cm以下のキビ土ブロック(30%)を含む。	盛土
第29層	黒褐色土	10YR 2/2	ほぼ無し	やや強	ややキビ土の混ざった黒ボク土層。第16層、第30層との境界が曖昧で、明瞭に分層することはできない。	自然堆積土
第30層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや強	やや強	第29層にくらべ、キビ土がマーブル状に混ざった土層。ブロックで混入というわけではなく、盛土の状況とは異なる。	自然堆積土
第31層	黒褐色土	10YR 2/2	弱	弱	径2.0cm以下のキビ土ブロックを含む。墓壙を掘り込む前に墳丘を整地するための盛土。	整地土
第32層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	やや強	北墳端付近まで広がる可能性あり。	ST03封土
第33層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	強	径1.0cm以上のキビ土ブロックを含む。第19層と対応するが、色調は異なる。	ST03裏込め土
第34層	暗オリーブ褐色土	2.5YR 3/3	弱	やや強	径0.5cm以下のキビ土ブロックを含む。第33層とはキビ土ブロックの含み方に差異がみられる。	ST03裏込め土
第35層	黄褐色土	10YR 5/6	やや弱	強	径0.5～1.0cmキビ土ブロックを多く含む。	ST03裏込め土
第36層	黒色土	7.5YR 2/1	やや弱	強	径0.5cm以上のキビ土ブロックを含む。	ST03裏込め土
第37層	黒色土	2.5YR 2/1	弱	強	径0.5cm以下のキビ土ブロックを含む。	ST03封土
第38層	暗褐色土	7.5YR 3/4	弱	強	砂質土。aトレンチ1区東壁にはみられない。	ST03裏込め土
第39層	黒色土	7.5YR 1.7/1	やや弱	やや強	粘質土。aトレンチ1区東壁にはみられない。	ST03木棺痕跡?
第40層	黒色土	10YR 1.7/1	やや強	やや強	粘質土。	ST03裏込め土
第41層	黒色土	10YR 2/1	やや弱	強	かなりキメの細かい土質である。aトレンチ2区東壁第27層と類似するが、土質は異なる。	墳丘斜面盛土

第42層	暗褐色土	10YR 3/3	やや弱	やや弱	砂質土。第17層、第41層とは異なる土質。	ST03封土
第43層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	弱	粘質土。直径0.5cm以下のキビ土ブロックがよく混じる。	ST03封土
第44層	黒色土	2.5Y 2/1	やや弱	強	砂質土（極細砂）。aトレンチ2区東壁第24層と対応すると考えられるが、土質は全く異なる。	ST03裏込め土
第45層	黒色土	7.5YR 1.7/1	やや強	やや弱	砂質土。土層サンプルを採集。aトレンチ2区東壁には見られず。	木棺痕跡？
第46層	黒色土	2.5Y 2/1	やや弱	強	砂質土。第44層と土質が非常に類似する（同一と考えられる）が、第45層によって切られていることを考慮し、別の層とする。	ST03木棺内の土、ST03裏込め土
第47層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	やや弱	径1.0cm程度のキビ土ブロックをまばらに含む。第17層の上に乗れ、第51層と同一層の可能性あり（攪乱があり、層の境目が不明瞭）。	ST05封土
第48層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	径0.5cm以下のキビ土ブロックを含む。棺内の土と棺の封土に分層できると考えられるが、明確に分層できなかったため一層としてまとめた。	ST05棺内埋土・封土
第49層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや弱	強	径1.0cm以上のキビ土ブロックを多量に含む。	ST05裏込め土
第50層	黒褐色土	10YR 2/2	強	弱	径1.0cm以下のキビ土ブロックを多数含む。	ST05裏込め土
第51層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	弱	径0.1cm程度の微細なキビ土ブロックをまばらに含む。土質は第47層に近い。ただし不明瞭。	ST05封土、もしくは盛土
第52層	黒褐色土	10YR 3/1	やや強	やや弱	墓壇を掘り込む前に墳丘を整地するために盛った土。	整地土
第53層	黄灰色土	2.5Y 4/1	やや弱	強	粘質土。aトレンチ3区北壁・4区南壁にまたがる層。aトレンチ4区南壁の層はaトレンチ3区北壁の層に比べ、層が薄い。	盛土
第54層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	粘質土。aトレンチ3区東壁第50層と同一の層であると考えられるが、土質は異なる。キビブロックは含まない。	ST05裏込め土
第55層	暗褐色土	10YR 3/3	やや弱	やや強	砂質土。墳丘斜面東側へ広がっていると考ええる。	盛土
第56層	オリーブ褐色土	2.5Y 4/4	やや弱	強	粘質土。木の根による攪乱がある。直径10cm以上のキビ土ブロックを含む。	ST05裏込め土
第57層	暗オリーブ褐色土	2.5Y 3/3	やや強	やや弱	粘質土。木の根による攪乱がある。直径0.5cm以下のキビ土ブロックがまばらに混じる。	ST05裏込め土
第58層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	強	砂質土。	SX06の埋土
第59層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや弱	強	直径0.3～1.5cmの黒色、灰白色、黄褐色、明黄褐色の粒が存在する。	SX06の作業面を作る際の埋土
第60層	にぶい黄褐色土	10YR 4/2	やや強	やや強	第59層と同色・同大の粒が存在する。	SX06の作業面を作る際の埋土
第61層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや強	やや強	直径0.3～1.0cmの第59層と同色の粒が存在する。	
第62層	灰黄褐色土	10YR 4/2		やや弱	直径1.5～2.0cmの第59層と同色の粒が存在する。第61層と接する部分にキビ土、第65層と接する部分に黒土が多く混じる。	SX06の作業面を作る際の埋土
第63層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	やや強	直径0.1～1.0cmの第59層と同色（黄褐色は含まない）の粒が存在する。土壌中心にキビ土が多く混じる。	SX06の埋土
第64層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや弱	強	直径0.2～1.0cmの第59層と同色の粒が存在する。	SX06の埋土
第65層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや強	やや強	直径0.2～2.0cmの第59層と同色の粒が存在する。第61層との境にキビ土が多く含まれる。	SX06の埋土
第66層	灰黄褐色土	10YR 4/2	やや弱	強	直径0.1～0.8cmの第59層と同色の粒が存在する。	SX06の作業面を作る際の埋土
第67層	灰黄褐色土	10YR 4/2	やや強	やや弱	直径0.5～1.0cmの第59層と同色の粒が存在する。	SX06の作業面を作る際の埋土
第68層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	ほぼ無し	強	径1.0cm程度の黒ボクブロックを含む。	盛土
第69層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	ほぼ無し	強	シルト質。	ST07裏込め土
第70層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	弱	強	径1.0cm程度の黒ボクブロックを含む。	ST07裏込め土
第71層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	弱	シルト質。	ST07木棺痕跡
第72層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	なし	強	砂質土。	
第73層	褐色土	10YR 4/4	やや強	やや強	砂質土。	ST07木棺内流入土
第74層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	弱	極細砂。直径0.5～1.0cm以下のキビ土ブロックを含む。	ST07木棺内流入土
第75層	褐色土	10YR 4/6	やや強	やや強	砂質土。直径0.5～1.0cm以下のキビ土ブロックを含む。	ST07裏込め土
第76層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	強	砂質土。地山層の直上に位置し、旧表土（第16層）と明らかに異なる土。	墳丘斜面盛土
第77層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	強	砂質土。レベル的には旧表土（第16層）と同じだが土質が大きく異なるため別層とした。	墳丘斜面盛土
第78層	褐色土	7.5YR4/4	弱	やや強	砂質土。	b,cトレンチの3度目の流土層
第79層	黒褐色土	7.5YR3/2	弱	やや強	砂質土。	b,cトレンチの2度目の流土層

第80層	黒褐色土	5YR2/1	やや強	弱	黒ボク土。	b, cトレンチの最初の流土層
第81層	褐色土	7.5YR4/4	弱	やや強	第78層と同じ土色と土質。	dトレンチの2度目の流土層
第82層	黒褐色土	5YR2/2	やや強	弱	黒ボク土。第80層と同質の土。	dトレンチの最初の流土層
第83層	褐色土	7.5YR4/4	やや強	やや強	砂質土。	eトレンチの4度目の流土層
第84層	暗褐色土	7.5YR3/3	強	やや強	砂質土。	eトレンチの3度目の流土層
第85層	暗褐色土	7.5YR3/3	強	やや強	極細砂。	eトレンチの2度目の流土層
第86層	黒褐色土	10YR3/1	ほぼ無し	やや強	黒ボク土。他の黒ボク土と比べて湿り気がある。	eトレンチの最初の流土層

付表2 佐田峠墳墓群3号墓出土土器観察表 []内は復元値

番号	器種	部位	トレンチ	径 (cm)	形態・文様等	調整	色調	土色	備考
1	甕	口縁部 ～胴部	aトレンチ 1区	口径 [13.4] 胴部径 [14.6]	口縁端面に凹線文。 肩部・胴部に刻目のち 凹線文。	口縁部横ナデ。胴部内 面左下がりのヘラケズ リ。	にぶい黄 橙色	10YR7/4	口頸部に1孔。 径は不明。
2	甕	口縁部 ～肩部	aトレンチ 1区	口径 [20.1]	口縁端面・肩部に 凹線文。	口縁部・頸部横ナデ。	にぶい黄 橙色	10YR7/4	
3	甕	口縁部	aトレンチ 1区	—	口縁端面に凹線文。	口縁部横ナデ。	黄橙色	10YR6/4	
4	甕	口縁部	bトレンチ	—	口縁端面に凹線文。	口縁部横ナデ。	外面：褐灰 色(内面：に ぶい橙色)	外面： 7.5YR4/1 内面： 7.5YR7/4	
5	甕	底部	eトレンチ 北壁	底径 [3.7]		外面縦ハケ+横ナデ。 内面ナデ。	外面：黒褐 色(内面：に ぶい黄橙色)	外面： 10YR3/1 内面： 10YR6/4	
6	高杯	杯部	eトレンチ	—	杯底部に円盤充填 法。	杯部内面指頭圧痕 有。	外面：にぶ い橙色(内面 ：灰黄褐色)	外面： 7.5YR7/4 内面： 10YR6/2	
7	高杯	杯部～ 柱部	eトレンチ	—	柱部に凹線文。杯底 部に円盤充填法。	杯部内面多方向から のハケ。	外面および 柱部内面： にぶい黄橙 色(内面：暗 灰黄色)	外面・柱 部内面： 10YR7/4 内面： 2.5YR5/2	
8	高杯	口縁部	aトレンチ 2区	—	口縁部に凹線文+棒 状浮文。	口縁部横ナデ。	にぶい黄 橙色	10YR7/4	昨年度報告の高杯 と同一個体。
9	高杯	柱部	bトレンチ	—	柱部に凹線文。	外面縦ヘラミガキ、柱 部内面横ヘラケズリ。 内面にシボリ痕あり。	にぶい橙色	5YR7/4	外面に赤色顔 料の付着あり。
10	高杯	脚部	eトレンチ	—	脚部に凹線文。	内面横ナデ。	にぶい橙色	5YR7/4	
11	高杯	脚部	bトレンチ	—	脚部に凹線文。	内面横ヘラケズリ。	にぶい橙色	5YR7/4	
12	注口付 脚台 付鉢	鉢部・ 脚部	aトレンチ 1・2区	口径 [27.0] 胴部径 [35.1] 底径 [26.0] 注口径 3.7	算盤玉形の胴部。鉢 部外面に凹線文+斜 格子文+菱形文。脚部 外面に凹線文+菱形 文+刻目+鋸歯文。	鉢部内面多方向のハ ケ+横ナデ、鉢部外面 縦ヘラミガキ+横ヘラ ミガキ、脚部内面横 ヘラケズリ。注口内面 にシボリ痕。	鉢部外面： 橙色鉢部(内 面：にぶい 黄橙色)脚部 ：にぶい橙 色	鉢部外面： 7.5YR7/6 鉢部内面： 10YR7/4 脚部： 7.5YR6/4	外面に赤色顔 料の付着あり。 鉢部の文様に 一部方向の異 なる部位がみら れる。
13	不明	不明	aトレンチ 2区	—	凹線文+菱形文。	内面横ヘラケズリ+横 ナデ。	にぶい褐 色	7.5YR6/3	12の脚部の一 部の可能性あ り。
14	不明	不明	aトレンチ 1区	—	凹線文。	外面横ナデ。	橙色	7.5YR7/6	12の鉢部と脚 部の接合部の 可能性あり。
15	不明	不明	cトレンチ	—	凹線文+複線鋸歯文。	内外面ともに摩耗の ため不明。	橙色	7.5YR7/6	

※土色については『新版 標準土色帖』による

2009 年 3 月 31 日

広島大学大学院文学研究科
帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 XXIII
(考古学研究室紀要 第 1 号)

編集・発行 広島大学大学院文学研究科
帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室
〒739-8522 広島県東広島市鏡山一丁目 2 番 3 号
TEL・FAX (082) 424-6663

印刷 電子印刷株式会社
〒730-0853 広島市中区堺町一丁目 1 番 5 号
TEL (082) 503-0365